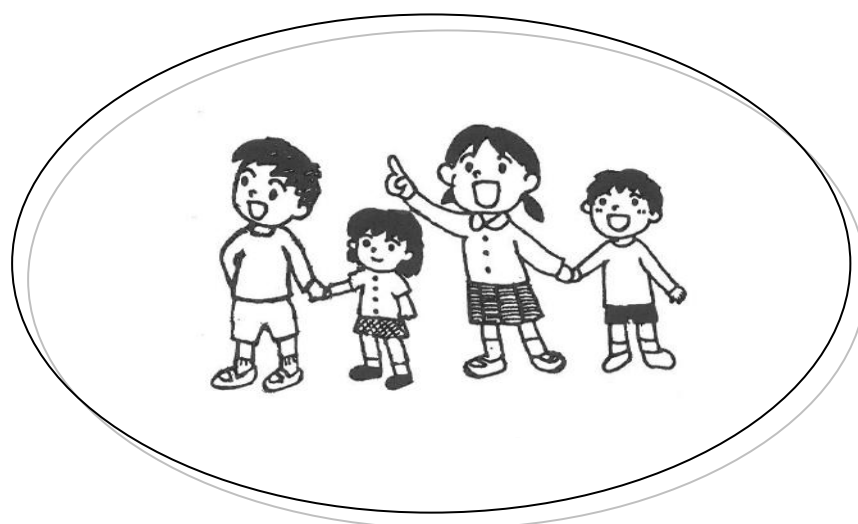


中野区 就学前教育プログラム



平成24年12月

中野区教育委員会

はじめに

中野区教育委員会教育長
田 辺 裕 子

私たちのまち、中野をこよなく愛する子どもたちが、毎日の生活を楽しみながら自分らしさを精一杯発揮して生き生きと学び、自分の力を信じて仲間と共に未来の中野区を、日本を、そして世界を支え発展させていく力を身につけていく。「中野区教育ビジョン（第2次）」は、そんな中野の子どもたちを育てることを目指しています。その中で、幼児期から学齢期、さらに生涯を通じた教育の目標を掲げ、その実現に向けた道筋を示しました。

このような教育を進めていく際に重要なことは、「つながり」を大切に生かしていくことです。この「中野区就学前教育プログラム」に示した教育の連携の取り組みは、子どもの発達に添って出生から小学校入学期まで、豊かな人間性や社会性、確かな学力、心身の健康や体力などの「生きる力」を育てていく「つながり」、子どもたちの成長を支える縦に伸びる「つながり」です。これは、その後の中等教育・高等教育からやがて社会人として生涯にわたる学びを支える連携へとつながっていきます。

子どもにとって心の居場所である「家庭」、学びの場であるだけでなく地域のコミュニティーの核としての役割を果たす「学校」、日々生活し行動する場としての広がりや懐の深さをもつ「地域」の連携、これらは横に広がる「つながり」です。子どもたちのより健やかな成長を願う家庭、保育園・幼稚園・学校、地域の真摯な取り組みが大きな成果をもたらすのは、それぞれの力が重なり合ったときです。教育ビジョンでは、これを「家庭、地域、学校の連携」という言葉で示しました。

特に就学前教育においては、子どもの心身の成長を支え育むために「家庭、地域、保育園・幼稚園・学校の連携」はきわめて大きな役割を担っています。子どもたちが一人の人間としてその可能性を十分に発揮できる「生きる力」の基礎を培い、世の中をよりよいものにしていく努力を惜しまない社会人として育てていくためには、子どもを取り巻く様々な人々の温かいまなざしと適切な援助が必要です。また、保護者が安心して子育てするためには、保育需要に十分対応できる態勢づくりなど子育てしやすい環境の整備とともに、何よりも一人一人の保護者が子育てを楽しみ喜びを実感できるように、保育園・幼稚園・学校、地域が保護者と協力し、支え合っていく関係を作り上げていくことが大切です。

このプログラムには、子どもを取り巻くすべての人々の縦と横の「つながり」の中で、子どもたちに確かな発達と豊かな生活を保障していきたい、という願いが込められています。関係者の皆様には、このプログラムを活用し、中野という地域の特性を生かして就学前教育の充実を図っていただくことを期待しております。

最後になりましたが、昨年からのこのプログラムの作成に熱心に取り組んでこられた「保育園・幼稚園と小学校との教育連携検討会」委員、作業部会委員をはじめとして、ご協力いただいた皆様から感謝申し上げます。

目次

はじめに

第1章 総説

I 中野区の就学前教育の現状	3
1 中野区の現況	3
2 中野区の子どもの姿	4
3 中野区が目指す子ども像	4
II 就学前教育について	5
1 中野区におけるこれまでの就学前教育の取り組み	5
2 就学前教育の考え方	5
3 教育の連携についての基本的な考え方	5
4 就学前教育プログラムの構成	6

第2章 就学前教育プログラム

I 発達に応じて確実に経験させたい内容	9
II 就学前教育の充実・発展に向けた連携の取り組み	15
1 教育の連携への取り組み	16
(1) 地域の小学校、保育園、幼稚園の継続的な連携の取り組み	16
(2) 子どもの交流活動を通して教育内容・方法の相互理解を深める取り組み	18
(3) 教育の連携を支える保護者の理解を深める工夫	20
(4) 教育の連携を進める中野区の取り組み	22
2 「発達に応じて確実に経験させたい内容」を積み重ねる指導事例	24
(1) 健康な心と身体につながる視点から	24
① 0歳児（12か月頃） 「はじめの一步！できたよ。パチパチ」	26
② 1歳児（おおむね1歳6～8か月） 「まねっこしてみよう」	28
③ 2歳児（9月） 「跳んでくぐってジャンプしよう」	30
④ 3歳児（10月下旬） 「見て見て！こんなことができるよ！」	32
⑤ 4歳児（11月） 「ボール遊び、やってみると楽しいね」	34
⑥ 5歳児（5月下旬～6月中旬） 「こんどはこうやってみよう（しっぽとり）」	36
⑦ 小学校第1学年（6月） 体育科 単元「あそぼう どうぶつアスレチック」	38
(2) 接続期における取り組み（生きる力の基礎を培う3つの視点から）	40
①「学びの芽生え」から「確かな学力」へ	42
・ 5歳児（11月） 「みんなでわけよう（園庭のヒメリンゴの収穫）」	42
・ 小学校第1学年（4月） 算数科 単元「なかまづくりとかず」の導入	44
②「人とのかかわり・感じる心」から「豊かな人間性」へ	46
・ 5歳児（10月下旬～11月上旬） 「ゆっくり回る台を作ろう（回転寿司屋）」	46
・ 小学校第1学年（4月） 生活科 単元「みんなともだち（2年生との学校探検）」	48
③「生活習慣・運動」から「健康な心と身体」へ	50
・ 5歳児（1月～3月） 「見通しをもって自分の力で生活しようとする」	50
・ 小学校第1学年（4月） 「小学校の生活」	52

委員等名簿	54
-------	----

第1章

総説

I 中野区の就学前教育の現状

1 中野区の現況

(1) 就学前の集団生活の経験

中野区においては、保育園・幼稚園・認定こども園等幼児教育関連施設に在園する幼児の割合は年々増加し、平成21年度には就学前3年間に幼児の95%以上が集団生活を経験して小学校に入学している。(図表1)

図表1

保育園・幼稚園等在園率(平成21年度)

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
15.9%	30.1%	33.9%	95.3%	97.5%	97.7%

「中野区次世代育成支援行動計画(後期計画)」(平成22年3月)より

(2) 子どもの遊び場

中野区は、「中野区みどりの基本計画」(平成21年8月)に基づき、区内の公園緑地の整備を進めており(図表2)、妙正寺川、江古田川に沿って哲学堂公園や江古田の森公園一带にはまとまった緑地はみられるが、近隣区に存在する緑地と比較すると小規模である。(図表3)

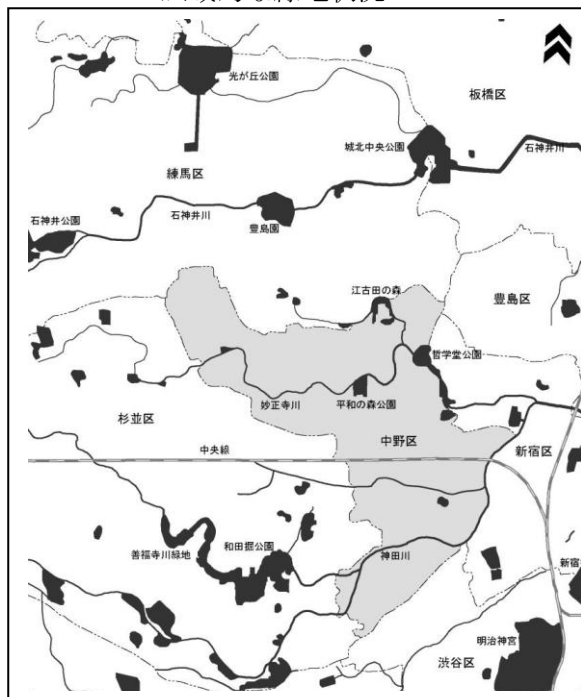
また、公園、児童遊園、ポケットパーク、広場等が各地域に点在しているものの、区民一人当たりの公園面積が1.3㎡と狭く、特に子どもが日常的に安心して遊べる緑地や公園が少ないのが現状である。

図表2
公園緑地の整備状況

区分	改訂前計画						現況 平成20年 (2008年)		
	計画策定時 平成13年 (2001年)		中間年次 平成18年 (2006年)		目標年次 平成23年 (2011年)				
	箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	
都市計画公園	街区公園	34	8.04	34	8.04	35	8.53	33	7.50
	近隣公園	-	-	-	-	-	-	-	-
	地区公園	2	4.11	2	6.11	2	12.50	2	11.36
	総合公園	1	8.00	1	8.00	1	8.00	1	7.63
	小計	37	20.15	37	22.15	38	29.03	36	26.49
都市計画緑地	1	0.10	1	0.10	1	0.10	1	0.10	
都市公園	114	7.92	117	8.31	120	9.04	117	8.58	
条例等の公園	条例公園	1	1.73	1	1.73	1	1.73	1	1.33
	ポケットパーク	4	0.06	4	0.06	5	0.09	5	0.08
	児童遊園	12	1.15	12	1.15	12	1.15	11	1.05
	広場	3	1.56	3	1.56	3	1.56	4	1.55
	小計	20	4.50	20	4.50	21	4.53	21	4.01
合計	172	32.67	175	35.06	180	42.70	175	39.18	

* 現況(平成20年)では新宿区分の総合公園(哲学堂公園:0.37ha)と条例公園妙正寺川公園(0.4ha)を除いた面積とした。

図表3
広域的な緑地状況



「中野区みどりの基本計画」(平成21年8月)より

2 中野区の子どもの姿

小学校入学時に、保育園・幼稚園等でのそれまでの生活と小学校での生活の仕方のギャップから学校生活にうまく適応できない子どもたちが見受けられるという指摘をされることがある。しかし、中野区立小学校8校の小学校第1学年学級担任への聞き取り調査の結果では、「就学前の集団生活を通して社会性の基礎が培われていると感じる子どもの割合」は8割を超えている。その中でも、集団行動や学習規範について個別に指導が必要な子どもには、保育園・幼稚園と小学校とのより密接な連携が求められている。(2011, 2012 中野区幼児研究センター調査)

小学校の子どもたちの体力は長期的に低下傾向にある。保育園・幼稚園においても子どもたちの身体能力の平均は全国調査結果とほぼ同程度であるが、それぞれの子どもの生活や遊びの経験によって測定結果に違いが見られ、全体としてみると日常の生活の中での様々な動きの経験や活動量が不足していることが明らかになっている。

(2008～2010 中野区幼児研究センター調査研究)

3 中野区が目指す子ども像

教育基本法に規定されているように、幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。

「中野区教育ビジョン(第2次)」では、教育理念として「一人ひとりの可能性を伸ばし、未来を切り拓く力を育む」を掲げ、目指す人間像として「子どもたちは自分の可能性を伸ばし、豊かな人間性・社会性や確かな学力、健康・体力などの『生きる力』を身につけている」姿を示している。

さらに、幼児期の目標として「人格形成の基礎となる幼児期の教育が充実し、子どもたちがすくすくと育っている」姿を掲げ、家庭、地域、行政、学校がそれぞれの視点からその実現に向けて取り組む方向を示している。

また、「中野区次世代育成支援行動計画(後期計画)」では、「子どもたちは充実した教育・保育環境の中で、自分の可能性を伸ばし、豊かな人間性・社会性や確かな学力・健康・体力などを身につけながら、自立に向けて成長している」と示している。

II 就学前教育について

1 中野区におけるこれまでの就学前教育の取り組み

区内各保育園・幼稚園では、保育所保育指針・幼稚園教育要領に基づいて子どもの発達にふさわしい保育課程・教育課程を作成し、それぞれに創意工夫して保育及び教育の内容の充実を図っているところである。

また、区内各地域では、保育園・幼稚園・小学校が地域の実情に応じて保育園・幼稚園間の交流、保育園・幼稚園と小学校相互の交流活動等を工夫して実施しているが、地域によって取り組みの内容・方法は様々である。

さらに中野区では、保幼小連携の先駆的な取り組みとして、区内の保育園・幼稚園・小学校の教職員が参加する「保育園と幼稚園と小学校との連絡協議会」を毎年開催し、保幼小関係者は相互の保育内容・教育内容等についての理解を深めるよう努めてきた。

子どもの健康・体力等については、幼児研究センター、教育委員会事務局はそれぞれ就学前教育、小学校以降の教育にかかる現状と課題を明らかにし、保育園・幼稚園を対象にした「運動遊びプログラム」の開発普及、小学校・中学校を対象として策定した「体力向上プログラムガイドライン」に沿って小・中学校全校が「体力向上プログラム」を作成・実施するなど、保育改善・授業改善に生かす具体的な取り組みを進めている。

2 就学前教育の考え方

子どもの健やかな成長を促すためには、家庭での生活から園での集団生活へ、園での遊びを中心とした生活から小学校での学習を中心とした生活へという子どもの生活の変化や広がりの中で、発達や学びの連続性を踏まえた教育環境の整備とともに、周りの状況の変化に対して子ども自身が適応していく力の育成が課題である。

そこで、「中野区教育ビジョン(第2次)」に示されているように、「生きる力」の基礎を培うとともに、幼児教育と小学校教育との連続性を踏まえた円滑な接続の在り方も視野に入れ、0歳児から小学校入学期までの保育・教育を「就学前教育」という一貫した流れの中でとらえることが重要である。

また、具体的な連携を推進していくためには、保育園・幼稚園・小学校関係者が「中野区教育ビジョン(第2次)」等に目標として示された子どもの姿を具現化する就学前教育のイメージを明確にしたうえで共有していくことが必要である。

3 教育の連携についての基本的な考え方

保育園・幼稚園相互、保育園・幼稚園等と小学校との教育の連携を深めていくためには、従来行われてきた子ども同士の交流活動や教員・保育士等の交流を含めて、それぞれの地域の特性を生かし、以下のような取り組みを通して相互の教育を見直すことが必要である。

- 中野区の目指す人間像に向かってどのような過程を経て子どもたちが育っていくか、就学前教育・小学校教育それぞれにおける具体的な姿について共通理解を図る。
- 子どもたちの育ちを促すために実践している保育園・幼稚園・小学校それぞれの教育の内容について、発達と学びの連続性を踏まえた相互理解を深める。
- 出生から小学校入学期にいたる各時期の発達の特性に応じて具体的にとられている指導方法の共通点と違いやその意味などを理解していく。

こうした相互理解・共通理解の基盤を確かなものとするのが、子どもにとって意味のある連携を進める大切な手掛かりとなると考える。

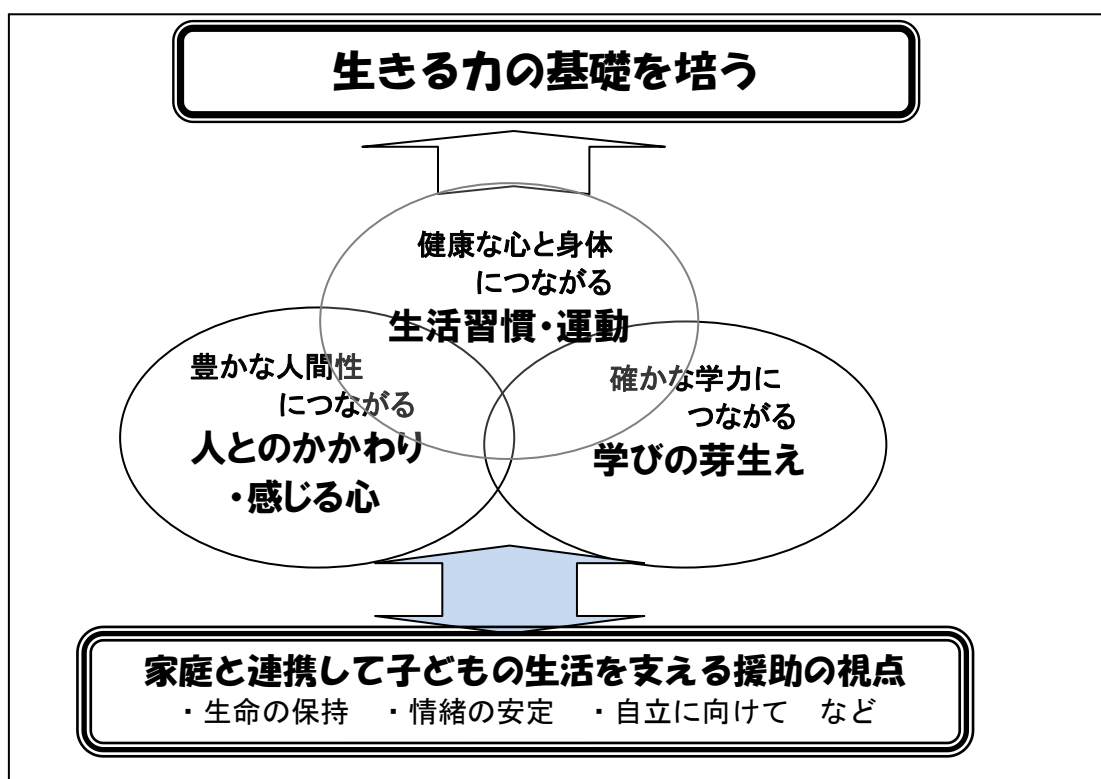
4 就学前教育プログラムの構成

そこで、区内の就学前教育にかかわるすべての施設や学校が教育の連携を具体的に進めていく際活用できるものとして、発達の時期に沿って、就学前教育全体を見通すことのできるプログラムを作成することとした。

就学前教育プログラムでは、教育内容の相互理解を図るため、各時期の発達の状況に応じて確実に経験させたい内容を示した。これは、中野区教育ビジョン等に示された「子ども像」及び「生きる力の基礎を培う」視点から、保育所保育指針・幼稚園教育要領に示された「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域の内容を、

- 『確かな学力につながる [学びの芽生え] 』
- 『豊かな人間性につながる [人とのかかわり・感じる心] 』
- 『健康な心と身体につながる [生活習慣・運動] 』

の3つの視点にまとめて示したものである。



また、本プログラムでは、子どもの園生活と家庭生活との連続性を重視し、保育所保育指針で示されている「養護」のねらい及び内容を検討して、「生命の保持」「情緒の安定」に加え「自立に向けて」など、『家庭と連携して子どもの生活を支える援助の視点』を加えた。

これは、大人への依存と信頼関係を基盤としつつ自立に向かう幼児期の発達の特性を踏まえ、保育者が具体的に行う援助やかかわりであり、保育園・幼稚園では、教育と一体となって日々展開されている。園における保育者のかかわりは、子どもの家庭生活における経験とも密接な関係があるので、ここで示す内容は、園の教育を支えるとともに、家庭生活での子育てを支援し、保護者への助言等「家庭との連携」を推進する際の参考となると考える。

さらに、具体的な連携を深める参考資料として、区内で実践されている教育の連携の具体的な取り組み例を示すとともに、発達に応じて確実に経験させたい内容を踏まえた指導（形態、展開、教材、遊具、空間 等）の充実を図っていく際の参考となるよう指導事例を示した。

第2章

就学前教育プログラム

I 発達に応じて確実に経験させたい内容

保育所保育指針・幼稚園教育要領に示されている5領域の内容を「発達に応じて確実に経験させたい内容」の3つの視点でまとめるにあたり、ここでは「思考」「言葉」「創造」「信頼」「協同」「感性」「規範」「基本的な生活習慣」「運動」の9点から捉えることとした。保育の中では、子どもはここに示した内容をそれぞれ別々の活動の中で経験しているのではなく、一つの活動の中で相互に関連する様々な内容を経験していることに留意することが必要である。

発達過程の区分は、保育所保育指針・幼稚園教育要領を参考に、その時期の子どものおおむねの発達の姿から設定した。具体的な指導に当たっては一人一人の発達の状況やそれまでの生活経験の違いなどを把握することが大切である。

		おおむね6か月未満	おおむね6か月から1歳3か月未満	1歳3か月から2歳未満
発達の特徴 確実に経験させたい 内容の視点		<ul style="list-style-type: none"> 首がすわるとともに、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど、全身の動きが活発になる。 視覚、聴覚などの感覚の発達が著しい。 表情の変化や身体の動き、喃語などで欲求を表す。 応答的にかかわる特定の大人に愛着を示すようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 座る、這う、立つ、伝い歩きをするなどの運動機能の発達とともに、周囲の人や事物への探索行動が活発になる。 特定の大人に自分の意思や欲求を伝えたり、やりとりを楽しんだりして愛着関係が深まる一方、人見知りをするようになる。 離乳食から幼児食へ徐々に移行する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自立歩行、指先、手足などの様々な新しい動きの獲得とともに、周囲の人、事物への自発的な働きかけが活発になる。 大人の語りかけや指示が分かるようになり、身体表現を伴う言語表現が活発になって、二語文（「ワンワン、イタ」など）を話し始め、親しい大人との言葉のやりとりを楽しむ。 「見立て」など象徴機能が発達し、身近な環境とのかかわりが深まる。
	「学びの芽生え」	<ul style="list-style-type: none"> 思考 言葉 創造 	<ul style="list-style-type: none"> ○戸外に出ることを喜び、周囲の事物に興味をもつ。 ○自分で移動して指先や全身を使って様々な素材や物にかかわり、音、色、感触、動きなどを感じながら一人遊びを楽しむ。 ○保育者の動きや音声をまねる。大人から自分に向けられた思いや簡単な言葉がわかり、一語文（マンマ・ブーブーなど）を話すようになる。 ○保育者が歌を歌ったり手遊びをしてくれたりするのを喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○戸外に出て、様々な自然の事象や動植物に興味をもち、触れてみようとする。 ○室内、戸外の探索活動を楽しむ。 ○保育者の語りかけや絵本の読み聞かせなどにより、理解する言葉が徐々に増え、知っている単語を使ってみようとする。 ○手や指先を使った遊びを繰り返し楽しむ。 ○砂や水などに触れ、様々な感触を楽しむ。 ○保育者と一緒に歌や手遊び、簡単なリズム遊びを楽しむ。
「人のかかわり・感じる心」	<ul style="list-style-type: none"> 信頼 協同 感性 規範 	<ul style="list-style-type: none"> ○いつも世話をしてくれる人が分かり、あやされることを喜んで、声を出したり笑ったりする。 ○声や泣き声で自分の欲求を表し、なだめられたり、受け入れてもらったりすることで、安心する。 ○落ち着いた雰囲気の中で、抱く、あやす、語りかけるなどしてもらうことで、安定した気持ちと喜びを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保育者と視線を合わせ、表情や喃語などを通して、やり取りを喜ぶ。 ○心地よい時は笑ったり、微笑んだりし、不快な時は泣いて要求する。 ○保育者の語りかけや働きかけに声を出したり、応えようとしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保育者を仲立ちとして、友達と生活や遊びの中で簡単な単語や物のやり取りをする。 ○保育者と触れ合ったり、話をしたりすることを通して、気持ちを通わせる。 ○表情や身振りなどで自分の気持ちを表したり、簡単な言葉を使ったりする。
「健康な心と身体につながる生活習慣・運動」	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣 運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○落ち着いた雰囲気の中で、寝入ったり、目覚めたりする。 ○ミルク以外のものも飲む。 ○少しずつスプーンに慣れる。 ○保育者に排便、排尿後、おむつを交換してもらい、快さを感じる。 ○手足を動かしたり、身体をそらしたりする。 ○目にしたものに手を伸ばし、指を使ってつかもうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○安定した寝入り、目覚めのリズムで過ごす。 ○徐々に様々な味や形態の離乳食に慣れていく。 ○排泄時、空腹時、満腹時等に、快不快を発声や身体の動きで表す。 ○身体発達の状況に応じて、寝返り、お座り、はいはい、高ばい、伝い歩きなどの身体の動きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○決まった時間に午睡をする。 ○色々な食べ物に興味をもって食べてみようとする。 ○保育者に手伝ってもらったり、自分でやったりして、スプーンやフォークを使って、食べようとする。 ○尿意を言葉やしぐさで表し、便器（おまる）に座るのを嫌がらなくなる。 ○歩く、走る、階段や段差を昇る、降りる、跳ぶなど、全身を使った動きを楽しむ。

家庭と連携して子どもの生活を支える援助の視点 ・生命の保持 ・情緒の安定 ・自立に向けてなど	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生面、室内の湿度・温度・明るさの調整等に十分配慮し、安全で快適な環境で過ごせるようにする。 ・家庭での様子、園での様子を伝え合って、適切な授乳量、睡眠時間等を確認し、体調の変化等に素早く対応できるようにする。 ・保育者の受容的で応答的なかかわりを基本に愛着関係を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギー反応等について家庭と十分確認して、離乳食を進めていく。 ・身体発達の状況を的確に把握し、身体の動きに応じて楽しさが感じられるような受け止め方を家庭と共有する。 ・様々な探索行動ができるよう、衛生、安全に配慮した環境を構成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な環境への興味のもち方、かかわり方の特徴をとらえるため、室内での遊びだけでなく、戸外での自然等への目の向け方も受け止め、連絡帳等を活用して、家庭との情報のやりとりを工夫する。 ・今まで大人に任せていたことを自分でしようとする姿や子ども同士の物の取り合いなど、様々な姿を保護者に丁寧に伝え、個人差も大きいことを理解した上で、その子の姿に沿った接し方を保護者と共有していく。
---	--	---	---

	おおむね 2 歳	3 歳児 (◎；主に初めて集団生活をする子どもに経験させたい内容)	4 歳児
発達の主な 確実に経験 させたい 内容の視点	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な全身の運動機能、指先の動きなどが発達する。 排せつの自立のための身体的機能が整ってくる。 語いが増加し、自分の意志や要求を言葉で表出できるようになり、強く自己主張をする姿が見られるようになる。 行動範囲が広がり探索活動が盛んになる。 模倣、見立てが活発になり、大人と簡単なごっこ遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 食事、排せつ、衣服の着脱など、基本的な生活に必要な行動が自分でできるようになる。 全身の運動機能の発達とともに、様々な身のこなしを獲得する。 語いが増加し、会話を楽しむ。特定の友だちとの遊び、簡単な集団での遊びを楽しむようになる。 身近の出来事について自分を中心として考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 動きのバランスをとる、コントロールするなどの身体能力、協応動作が発達し、2種以上の行動を同時に行えるようになる。 周囲の環境への関心が広がり、身近な事物や事象を友だちとの遊びに取り入れて楽しもうとする。 自分のイメージを言葉で伝えて、友達との遊びを一緒に楽しもうとする。
「学びの芽生え」 確かな学力につながる	<p>思考</p> <p>言葉</p> <p>創造</p> <ul style="list-style-type: none"> ○戸外で自然の事物に直接触れる。 ○保育者を仲立ちに、友だちと簡単な言葉のやりとりを楽しむ。 ○保育者との言葉のやりとりや絵本の読み聞かせを通して、言葉のリズムや繰り返しに興味をもち、自分も使ってみようとする。 ○自分がしてほしいことを身振りや言葉で伝える。 ○身近な遊具や物を使って、見立てや簡単なごっこ遊びを楽しむ。 ○砂や水などに触れ、様々な感触を楽しむ。 ○保育者と一緒に歌や手遊び、簡単なリズム遊びを楽しむ。 ○のりやハサミに興味をもって使う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎これまで経験したことのある遊具にかかわって過ごす。 ◎身近な事物に興味をもち、安心だと分かるとかかわってみようとする。 ◎保育者の話を聞いて、分かったことはやってみようとする。 ◎保育者による親しみのある絵本の読み聞かせや手遊びを楽しむ。 ○身近な動植物、自然現象などに興味をもってかかわる。 ○身近な事物に自分からかかわり、感触、形、使い方などに興味をもち、集めたり並べたりして遊び、見立てなどを楽しむ ○園内や近隣の身近な表示に関心をもつ。 ○生活や遊びの中で、身近なものの数や量に興味をもち、違いに気づく。 ○親しみをもって保育者の話を聞き、必要なことを言葉で伝えようとする。 ○日常生活に必要な言葉に気づき、自分も使おうとする。 ○挨拶など、人とのやりとりの快さを感じる。 ○絵本や紙芝居に興味をもち、見たり聞いたりすることを繰り返し楽しむ。 ○身近な素材や用具を使って自分なりに描いたり作ったりする。 ○動物や乗り物など身近なものを、身体の動きで模倣する。 ○保育者と一緒に歌う、簡単な手遊びをする、リズムに合わせて身体を動かす、楽器を鳴らすなどを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自然の変化や物の性質（軽重、柔固、伸縮など）に気づき、自然物などを取り入れて遊ぶ。 ○身近な物の色や形などに興味をもち、集める、分ける、組み合わせるなどを楽しむ。 ○身近な道具の使い方に慣れ、様々な場面で使おうとする。 ○絵本や図鑑に興味をもち、気に入ると繰り返し見る。 ○具体的な物を通して数や量に関心をもち、数えたり比べたりする。 ○保育者や友だちに親しみをもって挨拶したり、言葉のやりとりを楽しんだりする。 ○遊びや生活に必要な言葉の意味を知り、進んで使おうとする。 ○絵本や歌などの言葉の面白さに気づき、繰り返し声に出して楽しむ。 ○絵本や紙芝居などの内容に興味をもち、イメージを楽しむ。 ○様々な素材にかかわって、作ったものを使って友達と遊んだり、身に着けたりすることを楽しむ。 ○友だちと一緒に好きな曲を聴いたり、歌を歌ったり、リズムに合わせて身体を動かしたり、リズム楽器を鳴らしたりして音楽を楽しむ。 ○絵本や物語の登場人物や動物になりきって、動きを楽しむ。
「人のかかわり、感じる心」 豊かな人間性につながる	<p>協同</p> <p>信頼</p> <p>感性</p> <p>規範</p> <ul style="list-style-type: none"> ○一人遊びを楽しみながら、保育者が仲立ちとなり、友達にも関心をもって遊ぶ。 ○保育者と触れ合ったり、話をしたりすることを通して、気持ちを通わせる。 ○自分で表した気持ちや要求を受け止めてもらうことを喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎保育者の働きかけで、学級のみんなの中で、動いてみようとする。 ◎保育者の仲立ちで、同じ場にいる友達の動きに興味をもち、自分も動くとする。 ◎したことや感じたことなどを、保育者に受け止められ安心感をもつ。 ○保育者や友達と一緒に活動することを喜ぶ。 ○同じ場所にいる友達との触れ合いやかかわりを楽しむ。 ○喜んで身近にいるいろいろな人と触れ合う。 ○保育者の働きかけによって、やって良いことと悪いことを知る。 ○保育者の仲立ちで、遊ぶものの貸し借り、交代、順番を待つなどの約束があることを知り、それを守ろうとする。 ○みんなでする物があることが分かり、一緒に使おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○仲の良い友だちの中で、思いや考えを出し合いながら遊ぶ楽しさを味わう。 ○友達とのかかわりの中で、思い通りにならないことや気持ちのぶつかり合いを通して、相手にも思いや考えがあることに気付く。 ○自分から友達に優しくしたり、友達に優しくしてもらったりする快さを感じる。 ○学級(クラス)の友達と声や動きなどがそろ心地よさを感じる。 ○異年齢の子どもに親しみをもってかかわり、楽しさを感じる。 ○地域の方など、来園者に親しみをもち、様々な人とかわる楽しさを感じる。 ○自分なりにやり遂げた満足感やそれを身近な人に認められる喜びを通して、自信をもつ。 ○友だちと楽しく生活する中で約束やきまりの大切さに気づき、守ろうとする。 ○やって良いことと悪いことが分かり、自分なりに考えて行動しようとする。 ○みんなでする物を大切にしようとする。
「生活習慣・運動」 健康な心と身体につながる	<p>基本的な生活習慣</p> <p>運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○楽しい雰囲気の中で、様々な食べ物を食べようとする。 ○食べるものに応じて、スプーン、フォークなどを使って食べる。 ○トイレでの排泄に慣れる。 ○保育者に見守られ、一人で衣服を着脱しようとする。 ○保育者と一緒に所持品の支度をする。 ○保育者の働きかけで、危険なことや危険な場所に気づく。 ○保育者と一緒に身近な遊具等にかかわったり、身体を動かして遊んだりすることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎保育者の援助で園での生活の仕方を知り、繰り返す中で安心して園で過ごすようになる。(身支度、所持品の始末、トイレの使い方、食事など) ○楽しい雰囲気の中でみんなと一緒に食べる。 ○自分の生活に必要な行動（清潔、着脱、食事、排泄など）が分かって自分でしようとする。 ○保育者の援助で危険な場所や遊び方を知り、気を付けようとする。 ○保育者と一緒に戸外で身体を動かすことを楽しむ。 ○身近な遊具や用具を使った遊びを楽しみ、自分なりに身体を動かす心地よさを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○食べることを楽しみ、苦手なものも食べてみようとする。 ○遊びや生活に必要な用意や片付けなどのやり方が分かり、自分からしようとする。 ○健康な生活の仕方を知り、うがい、手洗い、衣服の調節を自分からしようとする。 ○園生活のきまりや危険なことが分かり、守ろうとする。 ○遊びの中で十分に身体を動かす楽しさを感じる。 ○身体を動かして、簡単なルールのある遊びや遊具や用具を使った様々な動きを組み合わせた遊びを楽しむ。

<p>家庭と連携して子どもの生活を支える援助の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命の保持 ・情緒の安定 ・自立に向けてなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動範囲の広がりや語いの増加と言語表現等の活発さに対して、自己主張の強さに戸惑いを感じる保護者には、その気持ちに寄り添いながら、この時期の発達の道筋を伝え、ともに見守っていく。 ・子どもが自分でしようとする事、実際にできることについて保護者と情報をやりとりし、子どもが自分でできる喜びが感じられる衣服、靴などを家庭で用意するよう助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進級、入園による環境の変化への戸惑いや不安を保護者とともに受け止め、園と家庭の様子を十分伝え合い、親しみのもてる環境を構成する。 ・子どもが自分でできる喜びが感じられるよう、扱いやすく、分かりやすい所持品や表示、生活の手順などを家庭と伝え合う。 ・それぞれの子どもの活動への興味のもち方や取り組み方の特徴を保護者に伝え、成長への期待と見通しをもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園と家庭、それぞれの生活の仕方やきまりを伝え合い、子どもが生活に見通しをもって自分からできるようにする。 ・友だちへの気持ちの向け方、かかわり方の変化などを伝え合って、保護者が安心して友だち関係を見守り、成長を感じられるようにする。 ・身近な事象への興味・関心の広がりや深まりの姿を知らせ、学びの芽生えとともに培う。 ・保護者同士のかかわりの機会を設けて、子育てする喜びを共感できるようにする。
---	---	---	---

	5歳児	小学校入学期
発達の特徴 確実に経験させたい内容の視点	<ul style="list-style-type: none"> 全身運動が滑らかで巧みになる。 細かい指先の動きが発達し、用具等の扱いが巧みになる。 人の考えを自分なりに判断し、違う考えを言ったり、受け入れたりしながら、生活を送ろうとするようになる。 生活の仕方や遊びに見通しをもち、友達と一緒に進めようとする。 知っていることや経験を生かして、友達と考えを出し合って工夫して遊びを楽しもうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> これまで経験した身体の動きを組み合わせ、目的に合った身のこなしや用具等の扱いができるようになる。 新しい生活の場に緊張や不安を感じるが、安心できる人や場をよりどころに、次第に学校生活に見通しをもてるようになる。 授業時間と休み時間など、場面と状況の違いを感じて、行動の仕方や自分の考えの出し方を考えるようになる。
「学ばせたい内容」 確かな学力につながる	思考 言葉 創造 <ul style="list-style-type: none"> ○様々な身近な事象に関心をもち、疑問を調べたり、試したりする。 ○物の性質や仕組みに気付き、遊びの中で生かそうとする。 ○自分で見付けたり提示されたりした目的や課題を自分のこととして受け止めると、自分なりに工夫して取り組む。 ○遊びの中で数唱すること、表示文字に触れることなどを通して数や文字に興味をもち、必要に応じて遊びの中で使う。 ○自分の思いを伝えたり、相手の言うことを受け入れたりしながら、友だちとの会話を楽しむ。 ○遊びや生活に必要なことを、相手に分かるように話し方や言葉を考えて伝えようとする。 ○聞いて心地よい言葉に気付き、自分も使おうとする。 ○進んで挨拶したり、みんなの前で話そうしたりする。 ○様々な体験を通して得たイメージを言葉で表現しようとする。 ○絵本や物語に親しみ、想像したり表現したりして、言葉の面白さを味わう。 ○様々な素材や用具を使って、自分なりの表現を楽しむ。 ○音楽に親しみ、友達と一緒に聴いたり表現したりして楽しむ。 ○物語のストーリーに沿って、友達とイメージを出し合いながら遊びを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の経験をもとに、身近な事象について自分なりの見通しをもって考える。 ○身近な環境にかかわる体験活動（学校探検、朝顔栽培など）を通して、身近な人や事物、自然などに関心をもつ。 ○ひらがなの学習を通して、語のまとまりや言葉の響きなどを意識して読むことや、場面に応じて言葉の強弱・高低・緩急などを使い分けることを知って、やってみようとする。 ○繰り返し話したり、文字を書いたりする中で、事物と言葉、事物と文字、言葉と文字、それぞれの関係に気付いていく。 ○具体的な物を使って、数量や序数など、数のもつ意味を理解する。 ○興味のある身近なことについて、喜んで人の話を聞いたり、話したりする。 ○場面や相手に応じた話し方や話の聞き方を知り、自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け止めようとする。 ○興味をもって絵本や簡単な物語を自分で読んだり、読み聞かせを聞いたりして、イメージを広げながら話の内容、語り口調、言い回しなどを楽しむ。 ○身近な材料や扱いやすい用具を使って、自分のイメージを表現することを楽しむ。 ○材料を選んだり、遊び方を考えたりして、遊びに使うものを工夫して作る。 ○学級の友だちと一緒に、リズムにのって歌ったり、身体を動かしたりする快さを感じながら、音楽を楽しむ。 ○身近な楽器の音色や音の響きの違いを感じながら、演奏を楽しむ。
「人とのかかわり、感じる心」	協同 信頼 感性 規範 <ul style="list-style-type: none"> ○友達とのかかわりでうまくいかない経験を通して、友達と一緒に問題や課題を乗り越えようとする。 ○友達と一緒に活動する中で共通の目的を見だし、思いや考えを受け入れ合いながら、やり遂げる充実感を味わう。 ○自分の思ったことを相手に分かるように伝えたり、人の話すことを相手の立場に立って受け入れたりする。 ○身近な友達とのかかわりを深めるとともに、異年齢児など様々な幼児とのかかわり、思いやりや親しみをもつ。 ○高齢者をはじめ地域の方々など、自分の生活にかかわる様々な人に親しみをもつ。 ○目的に向け粘り強く挑戦する取り組みを様々な人に認められることを通して、自信をもって新たな課題に向かう。 ○友達と一緒に遊びを楽しくするための工夫をする中で、自分たちで約束を決め、守っていこうとする。 ○やって良いことと悪いことが分かり、自分なりに考えて行動しようとする。 ○みんなで使う物を大切にし、使い方のルールを考えて、守ろうとする。 ○園生活に必要なことを友達と一緒に考え、自分の役割を果たしていこうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○新たに仲良くなった友達と一緒に過ごす楽しさを共感する。 ○同じグループになった友達と、簡単な課題と一緒に考えて解決しようとする。 ○係や当番の仕事の内容や手順が分かって、責任感をもって進んで仕事をする。 ○身近な年少者や高齢者に親しみ、相手のことを考えて行動する。 ○自分が出来るようになったことや家庭や学校での役割を期待されていることを喜び、自分の成長を支えてくれる人に感謝の気持ちをもつ。 ○身近な年長者に親しみと敬愛の気持ちをもってかかわる。 ○良いことと悪いことを判断して、正しいと思う行動する。 ○学校生活のきまりや友だちとの約束を守ることの大切さを知り、みんなで使う物や場所を大事にしようとする。
健康な心と身体につながる「生活習慣・運動」	基本的な生活習慣 運動 <ul style="list-style-type: none"> ○健康と食べ物に関心を持ち、なんでも食べようとする。 ○身の回りの始末や片付の必要性を知り、自分からしようとする。 ○健康な生活に必要なことを理解し、うがい、手洗い、衣服の調節等を進んで行う。 ○危険なことが分かり、周囲の状況を見て行動しようとする。 ○自分の目的に向かって繰り返し挑戦したり、チーム対抗の遊びなどを楽しんだりする。 ○様々な遊具や運動用具を工夫して使い、友だちと一緒にいろいろな遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○規則的な生活リズムが大切なことを知り、自分からしようとする。 ○互いの気持ちを通わせるために、あいさつや返事が大切なことを知り、自分からしようとする。 ○健康で安全な生活を送るために必要なことが分かり、状況に応じた判断をして行動する。 ○ルールや安全な遊び方を知って、いろいろな運動遊びを楽しむ。 ○簡単なルールを友達とつくって、思い切り身体を動かす遊びをしたり、遊具や器具などを使って様々な身体の動きをしたりして、身体を動かす楽しさを味わう。

家庭と連携して子どもの生活を支える援助の視点 ・生命の保持 ・情緒の安定 ・自立に向けてなど	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが自分の力で生活を進める喜びが感じられるよう、仕事や手伝い、持ち物の整理の仕方などについて園と家庭で情報をやりとりする。 目的をもって意欲的に取り組んでいく園での姿を伝えるとともに、家庭での気付きを受け止める。 身体を動かす経験が心身の発達を促す大切な要因であることを伝え、家庭でも身体を動かす楽しさが味わえる工夫を共に考えていく。 具体的な姿を通して子どもの成長を喜び合うとともに、小学校での生活や学習に見通しと期待をもてるよう、小学校と連携して必要な情報を提供する。 友だちとの間に起こった問題を自分たちで解決していくために、大人のかかわり方を保護者同士で考える機会として、学級懇談会などを活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 一日の生活の仕方や係や当番の仕事の進め方など、入学前の集団生活の様子について、可能な範囲で情報を集め、保護者も子どもの学校生活に見通しをもち、安心して必要なかかわりができるようにする。 学校に持ってくる物や家庭学習などについては、子どもに伝えて自分で行うようにすることや、必要に応じて、連絡帳などを使って保護者に連絡することなどをあらかじめ保護者会等で伝えておく。 初めての学校生活に不安を感じる保護者もいることに配慮して、学級通信などを通じて子どもたちの様子を丁寧に伝えるよう工夫する。
---	---	--

Ⅱ 就学前教育の充実・発展に向けた連携の取り組み

教育の連携を推進し、就学前教育と小学校教育との円滑な接続を図っていくためには、保育園・幼稚園等と小学校とが第2章Ⅰに示した「確実に経験させたい内容」について共通理解するとともに、連携の取り組みを進める中で相互の「指導観」「連携を進める視点」「学習内容の評価の観点」などの共通点と違いに気付き、互いの教育内容・教育方法を支える価値観についての理解を深めていくことが重要である。

ここでは、中野区におけるこれからの就学前教育を充実・発展していく際の参考資料として、次の取り組みを取り上げた。

1では、中野区内で実践されている就学前教育と小学校教育の相互理解を深める取り組みとして「地域の保幼小の継続的な連携」「幼稚園5歳児と小学校4年生の図工授業での交流活動」「保護者の理解を深めるための保幼小の協力」「中野区の教育の連携の取り組み」を示した。

2では、保育及び授業において「発達に応じて確実に経験させたい内容」や学習内容をどのように身に付けさせるかを考える手掛かりとなるよう指導事例を示した。

本プログラムでは、「生きる力の基礎を培う」3つの視点

- 『確かな学力につながる [学びの芽生え] 』
- 『豊かな人間性につながる [人とのかかわり・感じる心] 』
- 『健康な心と身体につながる [生活習慣・運動] 』

を示しているが、中野区の教育では子どもの身体能力・体力の向上が、就学前教育及び小学校・中学校教育に共通かつ喫緊の重点的な課題の一つであることを踏まえて、はじめに「健康な心と身体につながる」視点から、0歳児から小学校1年生までの発達に沿った保育及び授業の指導事例を取り上げた。

次に、接続期の「確実に経験させたい内容」を考える参考として、接続期すなわち就学前と入学後の保育及び授業の指導事例をそれぞれ3つの視点から取り上げた。

なお、本プログラムでは取り上げていないが、中野区内では保育園・幼稚園と小学校だけではなく保育園・幼稚園と中学校、保育園と保育園、幼稚園と幼稚園、保育園と幼稚園の交流や参観、合同行事など、様々な連携の取り組みが始まっている。

1 教育の連携への取り組み

(1) 地域の小学校、保育園、幼稚園の継続的な連携の取り組み

[桃花小学校、桃園幼稚園、橋場保育園、桃が丘さゆり保育園 ほか]

取り組みに至る経緯

桃花小学校は平成20年4月、桃園第三小学校、仲町小学校、桃が丘小学校の三校が統合し、元の桃園第三小学校の位置に開校した。統合により学区域が拡大し、小学校に入学する幼児の在園する保育園、幼稚園の数が増えた。開校に当たって、各園での個々の園児の特性に応じたかかわり方について情報を得て入学後の指導に生かすことで、子どもたちの学習や生活の円滑な接続を図る必要性を感じた。そのため、小学校と個別の園との連携という従来の取り組みを超えた保育園、幼稚園との協力体制を構築し、組織的に行うことが求められた。

開校当初は、中野区で実施している「保育園と幼稚園と小学校との連絡協議会」の場を生かして情報交換を行ってきた。しかし、年1回数時間の協議時間という時間の制約やブロックのすべての保幼小が一同に会するという規模の大きさのため、協議内容をこの地域独自の課題に絞りきれないなどの問題点もあがり、「保幼小連絡協議会」とは別に独自の継続的な連携の取り組みを模索するに至った。

取り組みの概要

①情報交換会（年間3回）

◇第1回（5月下旬）

- ・ 関係保育園・幼稚園教職員の小学校第1学年授業参観（5校時）
- ・ 本年度入学児童の情報交換、連携事業の年間計画の協議

（なお、授業参観は6月初旬に開催される「保幼小連絡協議会」に向けて毎年実施している桃花小学校独自の事前授業参観を兼ねている。）

◇第2回（10月下旬）

- ・ 子どもたちの交流活動の内容、方法の検討、確認

◇第3回（1月下旬）

- ・ 新入学予定児の情報交換
- ・ 連携事業の年間の反省

②子どもたちの交流活動

- ・ 5歳児と小学校第1学年児童の生活科授業での交流（2月下旬）
（桃園幼稚園、橋場保育園、桃が丘さゆり保育園5歳児）
- ・ 小学校第6学年児童の職業体験学習(総合的な学習の時間)（1月中旬）
（桃園幼稚園、橋場保育園、桃が丘さゆり保育園）
- ・ 「桃花フェスティバル」(全校児童による児童会活動)への園児の参加（11月初旬）
（平日開催の場合の取り組み）

③小学校教員の保育園、幼稚園参観

- ・ 桃園幼稚園参観（6月）(小学校低学年担任及び専科教員)
- ・ 橋場保育園、桃が丘さゆり保育園参観(7月下旬) (小学校低学年担任及び専科教員)

④保育園、幼稚園の小学校施設利用

- ・必要に応じて随時実施（運動会、避難訓練などの行事 運動遊びでの校庭利用など）

取り組みの成果

[小学校]

- ・年間を通して継続的に実施することにより、保育園・幼稚園との相互理解が深まり、より率直な話し合いができるようになってきた。
- ・その結果、就学児についての話し合いでは、個々の児童への入学後のよりよいかかわりを前提に各園から情報提供がなされるようになり、それを基に新年度の学級編制を行っている。
- ・1回目の情報交換会（5月末）の授業参観で保育園・幼稚園の先生方に子どもの様子を見もらうことで、連携がうまくいっているかどうかの確認もできるようになっている。

[保育園、幼稚園]

- ・小学校行事への参加や小学生との交流を通して、進学に不安を感じていた子どもも具体的な小学校の生活を知ることで、安心感や期待感をもつことができる。
- ・連携の年間計画があらかじめあるので、多様な中でも日程を調整することができる。
- ・6年生の職場体験学習は、年齢の離れた子どもとの交流の機会が少ない子どもたちにとって貴重な経験となっている。また、卒園児の成長を確認できるよい機会となっている。
- ・連携の取り組みの具体的な内容を伝えることで、保護者も就学に安心感をもつ。
- ・相互に授業や保育を参観することで、小学校の生活、園の生活を理解し合い、保育園・幼稚園では小学校で戸惑わないための配慮、小学校では保育園・幼稚園での経験を生かす配慮を工夫することができる。

取り組みのポイント

- ・いつでも連絡できるように相互の連携の窓口を明確にするとともに、具体的な事業については、担当者同士で丁寧に内容や方法を確認する。
- ・情報交換、参観、交流を単発の取り組みに終わらせず、年間の流れの中で連携を深めていくために、それぞれの取り組みの具体的なねらいと内容を保幼小で十分検討し、連携の意義について相互理解を深める。

(2) 子どもの交流活動を通して教育内容・方法の相互理解を深める取り組み

[まこと幼稚園5歳児と中野昭和小学校（平成21年3月閉校）4年生]

取り組みに至る経緯

まこと幼稚園と中野昭和小学校は、徒歩数分の距離にあり、従来から学校施設や学校生活に親しみ、就学への不安を取り除くことを目的とした幼稚園5歳児の授業参観、学校行事への参加などの交流活動は行われていた。

こうした交流を積み重ねる中で、小学校を見学する、生活科などの授業や行事で一緒に遊ぶなどのかかわりを超え、幼小それぞれにとっての活動の意味を共に検討することが大切ではないかと考えるようになった。そこで、子どもだけでなく幼小の教員が互いの生活や教育についての理解を深め、真の教育連携の推進につながるよう、交流活動のあり方を見直すことにした。

始めの2年間は、生活科の授業の中で、5歳児と1年生が「自然探索」などの活動を5月から翌年2月まで継続して展開した。子どもたちは楽しんで活発に取り組んだが、年齢が近すぎることで互いの気持ちがぶつかり合うことが多く、「互いの理解を深める」というねらいを十分達成することが難しかった。

そこで、4年生の「図工」の授業で、5歳児との交流連携に取り組んでみることにした。4年生は、低学年よりは5歳児との年齢差があるものの、まだ自分中心に行動することも多く、高学年ほどは積極的に自分より低年齢の子どもを引っ張っていくところまでは成長していない。そこで、この交流を通して、年下の園児に対する思いやりを持ちながら自分の活動を充実できるようになるのではないかと期待した。また、5歳児にとっては、1年生とくらべて少し年上の4年生と活動することで、むしろ自分らしく生き生きと活動できるのではないかと考えた。

まず、予行演習を兼ねた顔合わせとして、「商店街の街路灯に飾る旗を一緒に作ろう」という活動を幼稚園児と4年生がグループに分かれて実施した。子どもたちは、幼稚園で2回、小学校で2回行われた活動に楽しんで取り組み、一緒に活動する幼児・児童に互いに親しみを持ち、幼稚園・小学校という場所にも慣れていった。

この体験を踏まえて、4年生の図工の授業に5歳児も参加し大きな段ボールを使って共同で秘密基地をつくるという交流活動を計画し、幼稚園と小学校の教員で事前の打ち合わせを積み重ねた。

取り組みの概要

「秘密基地をつくろう」

- ◇共通主題 「自分の考えや思いをもつ児童・園児の育成をめざして」
- ◇小学校図工 単元名「曲げて、つなげて、基地をつくろう」
- ◇単元ねらい 自由に曲げたり、丸めたり、穴をあけたりすることができる段ボールのよさを活かしてつくる
(小学校)
- ◇ねらい 小学生の人たちと一緒に、考えたことを出し合って、力を合わせて秘密基地作りを楽しむ
(幼稚園)
- ◇参加者 幼稚園5歳児25名（男児12名、女児13名）と小学校4年生40名（男児16名、女児24名）が9グループに分かれて参加した

◇活動時間 全8時間
[出会う]3時間、[試す]3時間、[深める]1時間、[成し遂げる]1時間
(うち5歳児・4年生が直接かかわるのは計4時間)

◇活動場所 幼稚園、小学校体育館

◇活動期間 平成20年10月8日～10月29日

ねらい、活動内容、活動方法はもとより、活動時間、用具の取り扱い、素材の選択や準備等について、事前に10回以上の打合せを行い、調整した。(5歳児には扱うことが難しい用具は、4年生だけの活動場面で取り扱うなど、双方の事情を勘案した具体的な計画を立案した。)

また、給食室の工事に伴って小学校が弁当持参であったことを活かし、活動の最終日には出来上がった秘密基地で一緒に遊んだ後、基地の中で一緒に弁当を食べて、すべての活動を終了した。

取り組みの成果

[幼稚園]

- ・小学校の授業に参加することにより、実際の活動をとおして小学校の生活時間や行動の約束事について理解することができ、小学校生活への不安が取り除かれた。
- ・この取り組みで経験したこと、小学生から教わったことを幼稚園での遊びに取り入れて、新たな発想をしたり工夫したりする姿が見られるようになった。
- ・回数を重ねて小学生と顔見知りになり、小学生の言うことを聞くだけでなく、話し合いに自分なりの考えを言うようになる姿も見られるようになった。小学生の話の聞いたりやっていることを見たりして影響を受け、ポスターカラーを手で塗る、手形で模様を描くなどの活動をする姿も見受けられた。このような経験を通して、年長者に対する接し方を学ぶ機会となった。

[小学校]

- ・5歳児とのかかわりの中で、「あの子たちのためにいいものをつくりたい」という気持ちから、積極的に素材を集めるなど、活動に対する意欲の高まりが見られた。
- ・自己中心的で、自分の思いをかなえたい気持ちが強かったが、自分が我慢しても5歳児を満足させてあげようとする姿が増えてきた。
- ・中学年(4年生)の児童にとって、活動全体を見通して、一緒に活動する自分より年少の相手のことに配慮して学習を進められたことが成長につながり、高学年への第一歩となった。

取り組みのポイント

- ・事前、事後の打合せ、話し合いを積み重ね、この活動における「学び」の違いなど、幼稚園、小学校それぞれにとっての活動の意味について互いの理解を深めるようにする。

[幼稚園]

- ・子どもたちに、「小学校では自分のしたいことをしてもいい場面と、してはいけない場面がある」など、小学校で活動する時の約束事項を伝え、小学校での行動について意識づけておくことが必要である。

[小学校]

- ・教科としてのねらいを踏まえて、単元の中で幼稚園児との交流場面と小学生単独で取り組む場面の組み合わせ方を工夫することが必要である。(教育課程上、小学校で実施した授業は図工の時数とし、幼稚園で実施した授業は総合的な学習の時間の時数とした。)

(3) 教育の連携を支える保護者の理解を深める工夫

[保育園・幼稚園等と小学校の協力]

現状と課題

就学前教育と小学校教育との円滑な接続を図り、教育の連携を推進していくためには、保護者の理解と協力が必要である。また、教科学習の開始や教室環境などの違いは、進学する子ども自身以上に、保護者が不安になる要因の一つでもある。特に、第1子を初めて小学校に進学させる保護者は、風聞によって小学校での学習の先取りの勉強をさせたり「そんなことをしていたら学校で先生に叱られますよ」と小学校生活への不安感をあおったりするなど、子どもに不必要で過度な負担を強いる場合がある。

各保育園・幼稚園等では、保護者が安心して小学校進学への準備を進められるよう的確な情報の提供に努めている。具体的には次のような機会を設けて、子どもの発達と学びの連続性や保育園・幼稚園等と小学校との教育方法の共通点と違いなどについて、繰り返し理解を深める取り組みをしている。

- ・保護者会、園だより等での情報提供
- ・教育学、心理学等の専門家による講演
- ・地域の小学校の校長、副校長、1年担任などによる小学校生活についての講話 など

また、各小学校では、就学先が決定すると保護者説明会を開催し、子どもと保護者が小学校生活を楽しみに準備できるように、必要にして十分な情報の提供の工夫を工夫している。

しかし、入学当初の児童の中には、小学校生活への不安から強い緊張を示す、新しい環境の中で行動の手掛かりを得られず注意力が散漫になるなどの姿が見られることがある。就学前に幼児教育関連施設に在籍する機会がなかったなど、様々な事情から小学校進学にかかわる適切な情報が保護者に十分伝わっていないことも一因と考えられる。

また、保育園・幼稚園等で小学校関係者に講話を依頼しても、地域によっては十数園から子どもが進学してくる小学校もあるため、すべての園の要望に個別に対応することが難しい場合もある。

現在は就学前の教育について様々な情報があふれているため、発達に添って就学に備えていくための適切な情報を、早い時期から様々な方法で保護者に提供していくことが必要である。

取り組み例

ここでは、それぞれの小学校、保育園・幼稚園等が各校園の特色、地域の特性に応じて保護者の理解を深める取り組みの工夫を図る参考として、現在区内で実践されている取り組み及び可能と考えられる方策を例示する。

① 学校だより、学級通信などを園に掲示する

- ・園に送付される学校だよりを園に掲示する。送付されていない場合は学校に依頼すれば協力を得ることができる。これによって各小学校の特色や行事などを知り、学校生活に親しみをもつきっかけとなることが期待できる。また、公開可能な内容であれば、第1学年の学級通信を掲示する。

② 学校公開日を活用した学校見学、懇談

- ・小学校から保育園、幼稚園等に事前に日程を知らせ、園だより等で参加を呼びかける。可能であれば、見学後に懇談会をもつことも保護者と学校との相互理解を図る上で有効であると考えられる。

③ 地域の小学校、保育園・幼稚園等の協力による小学校生活についての合同の説明会

- ・一つの小学校を中心に、そこに進学する子どもの多い園が協力して小学校関係者の講話を聞くなどの企画が進めやすい。特に1校に多数の園から進学する場合に有効と考えられる。
- ・地域の中で数園の卒園者と数校の入学者が交錯する場合、地域の保幼小で協議して具体的な取り組みを検討する。

説明会を、今年はA校、来年はB校、再来年はC校と「輪番制」で実施する方法やA校は4歳児保護者対象、B校は5歳児進級当初の講話、C校は秋以降の具体的な説明会を受け持つなど、内容を分けて実施する「分担制」など、実状に応じた工夫をする。

- ・地域内で協力する場合はどのような取り組みであっても、参加する各園の在園児保護者だけでなく、在宅幼児や地域外の園に通う子どもを含めた地域内のすべての子どもの保護者に情報が届くことが望ましい。特に在宅幼児の保護者への働きかけを工夫したい。例えば、町内回覧に添付を依頼する、区の広報掲示板貼付の承認を得るなどの方法が考えられる。

④ 園の保護者と小学校の保護者の合同懇談会

- ・特に第1子の保護者にとっては、小学校に通う児童の保護者から直接話を聞くことは、学校関係者による講話とは違った側面から学校生活を知り、安心感をもつきっかけとなる。なお、懇談の内容については、「楽しい学校生活を送るために」など取り上げる話題をあらかじめ明確に示しておくことが必要である。

(4) 教育の連携を進める中野区の取り組み

中野区では、これまで教育の連携を進める様々な取り組みがされてきている。今後の取り組みの手掛かりとするため、その一端を紹介する

① 保育園・幼稚園等と小学校等との連携

- 「ともに考える」 保育園と幼稚園と小学校との連絡協議会(再掲 p. 4)

昭和36年の私立幼稚園長と区立小学校長との懇談会に端を発し、昭和63年からは保育園も加わった中野区独自の先駆的な取り組みである。就学前の保育・教育と小学校教育との連携・接続について話し合う機会として、区内の保育園・幼稚園・小学校の教職員が参加して毎年開催されている。区内4ブロックに分かれ、保育園・幼稚園・小学校が毎年持ち回りで企画・運営を担当し、小学校を会場としている。

- 「ともに学ぶ」 幼稚園・小学校合同研修

公立幼稚園、公立小学校教諭を対象として、教育委員会事務局教育指導担当が課題研修の一環として実施する研修である。これまで、幼小に共通する運動遊びの実技、幼小の接続の課題にかかる講演などの内容で実施された。

- 「ともに学ぶ」 小学校・中学校教諭対象の体力向上研修への保育士・幼稚園教諭の参加

健康・体力にかかわる課題は乳幼児期からの生涯にわたる課題であるとの問題意識のもと、教育委員会事務局教育指導担当の実施する体力向上研修のうち、就学前教育にもかかわる内容の研修への希望する保育士・幼稚園教諭の参加を受け入れている。

- 「相手を知る」 小学校・中学校教諭の保育体験・観察研修

小学校・中学校教諭の初任者研修、10年経験者研修の課題研修の一つとして、保育園・幼稚園での保育体験・観察研修を通して保育・教育の内容・方法についての理解を深め、校種間の接続・連携の取り組みを進める手掛かりとする。

② 就学前教育関連施設相互の連携

- 保育士、幼稚園教諭の合同研究

公立・私立を問わず、区内の保育園・幼稚園等幼児教育関係者が幅広く交流・研鑽し合う機会として、平成19年度から幼児研究センターが実施している。平成24年度は、「乳児期（3歳未満児）の保育」「幼児期（3～5歳児）の教育」の二つの部会で、共に「身体を動かす遊び」に焦点を当て、計34人の研究生が実践的研究に取り組んでいる。

- 保育園・幼稚園の交流研修、実習、研究会等

- ・保育士の幼稚園への長期派遣研修

区内の就学前教育全体の質的向上に寄与することを目的に、公立保育園保育士が2～3年間にわたって公立幼稚園に派遣され、教育内容・方法・指導計画等、幼稚園教育全般について学んだ。平成21年度まで実施された。

- ・幼稚園教諭の保育園観察実習

同じく区内の就学前教育全体の質的向上に寄与することを目的に、公立幼稚園教諭が夏季休業期間に公立保育園で観察実習し、保育内容・方法とともに3歳未満児の発達への理解を深める。

- ・区立保育園・幼稚園研修

上記二つの研修の内容を深化させ、保育士と幼稚園教諭が共に学び、就学前教育全体を視野に入れて教育内容を充実・発展させることを目指し、平成24年度から実施している。平成24

年度は保育士19名が全日2日間、公立幼稚園の保育観察の後、発達を踏まえた教育内容の充実に向けて幼稚園教諭と協議を深めた。

・公私立保育園の交流実習

実践的に保育内容・方法の充実を図るため、公私立保育園の保育士が相互に園を訪問し、保育観察実習及び保育内容・方法について協議する。

・公私立幼稚園の合同研究会（「中野区幼稚園教育研究会」）

区内の幼稚園教育全体の充実・発展を目指して、昭和43年度公私立幼稚園の合同研究会として発足し、研究・研修に取り組んできた。平成22年度からは区内に設立された認定こども園も参加している。

③ 子どもの発達の特性を踏まえて、幼児期から小学校以降まで一貫して身体能力・体力の向上を目指す取り組みの方向性

「体力は、すべての活動の源であり、運動や健康のほか、気力や知力の充実に大きくかかわる、人の成長・発達を支える重要な要素である。」という体力の意義を踏まえ、子どもたちの体力の長期低下傾向を解決する取り組みとして、中野区教育委員会は「体力向上プログラムガイドライン」を策定し、区立全小学校・中学校は「体力向上プログラム」を作成し、実施している。

幼児期においても、子どもが身体を動かす機会が少なくなったことが幼児期における生活の充実のもとより成長後の健康、気力、知力に影響を与えることへの懸念は大きく、平成24年2月には文部科学省が「幼児期運動指針」を策定した。

中野区は、子どもの健康や体力の課題にいち早く取り組み、幼児研究センターでは身体能力測定の調査結果(2008～2010)から明らかになった区内の子どもの身体能力の課題を踏まえて、幼児期に十分に活動し多様な動きを経験することの大切さを訴えた。

特に、「投げる」「腕で身体を支えたり、回転したりする」「様々な身体の部位を動かす」という3つの経験が不足しているという実態から、「中野区運動遊びプログラム」の作成及び普及に取り組んでいる。このプログラムは前述の3つの経験に絞って、保育園・幼稚園での運動遊びの取り組みの道筋を示し、最終的には「子どもたちが身体を動かす遊びを楽しみ、主体的に取り組む」ことを目指している。

これは、「体力向上プログラム」の目標とする「自らの体力に対する関心を高め、主体的・継続的に体力づくりに取り組む児童・生徒の育成」につながるものである。「体力向上プログラムガイドライン」に示された体力づくりの6つの観点は、就学前教育においても実践を振り返る参考となり、今後教育内容の連続性をとらえていく際の手掛かりの一つとなると考えられる。



「体力づくり」の6つの観点（「体力向上プログラムガイドライン」より）

- ・運動や運動遊び、スポーツの楽しさを味わう体力づくり
- ・運動する意味を理解し、効果を実感できる体力づくり
- ・できた、わかったという達成感や成就感を大切にする体力づくり
- ・個に応じた課題の設定と、課題解決を大切にする体力づくり
- ・人とのかかわりを大切にする体力づくり
- ・食事や睡眠の大切さを理解し、生活改善につなげる体力づくり



2 「発達に応じて確実に経験させたい内容」を積み重ねる指導事例

第2章Ⅰに示した就学前教育において「発達に応じて確実に経験させたい内容」は、保育所保育指針及び幼稚園教育要領に示されているように、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものである。

本プログラムでは、「生きる力の基礎を培う」視点として、

- 「確かな学力につながる【学びの芽生え】」
- 「豊かな人間性につながる【人とのかかわり・感じる心】」
- 「健康な心と身体につながる【生活習慣・運動】」

の3点で「発達に応じて確実に経験させたい内容」をまとめている。日々の保育においては、子どもたちは、3つの視点に示した内容を別々の活動の中で経験するのではなく、一つの活動の中で相互に関連する様々な内容を経験するのである。

(1) 健康な心と身体につながる視点から

第1章及び第2章Ⅱ1(4)③に示したように、中野区では、子どもたちが身体を動かす様々な経験を積み重ねて、身体能力・体力の向上を図ることは就学前・小学校・中学校教育に共通する課題の一つである。そこで、ここでは健康な心と身体につながる視点から、発達に応じて展開する保育及び授業の指導事例を示した。

子どもの身体の動きや身体能力の発達は、「人とかかわる力」や「学びの芽生え」につながる「身近な環境を受け止める力」、「環境へ働きかける力」などの発達と密接に関連している。0歳児の指導事例を例にとると、子どもの自立歩行は身体を支える力や身体をコントロールする力などの身体能力の発達を前提にしつつ、保育者との愛着関係の成立、他児や保育者の動きの認識と模倣など「人とのかかわり」「学びの芽生え」の発達と絡み合いながら達成されていくことが分かる。

ここに示した指導事例は、その時期の子どものおおむねの発達の姿を前提としている。実際の指導に当たっては、一人一人の発達の状況やそれまでの生活経験の違いなどを把握した上で、子どもの姿から「経験している内容」を受け止め、それを「発達に応じて確実に経験させたい内容」に結びつけ、積み重ねていくことが重要である。

また、子どもの生活は園での経験と家庭での経験が相互に密接につながって営まれている。そこで、大人への依存と信頼関係を基盤としつつ自立に向かう幼児期の発達の特性についての理解を園と家庭で共有した上で、家庭との連携を進めていくことも重要である。

事例の見方

これまでの様子

・A児は、伝い歩きもスムーズで、時折月

この事例にいたるまでの子どもの様子（必要に応じて示す）

あがったりする姿が見られる。

ねらい

○大好きな保育者に向かって、自ら

この事例における心と身体にかかわるねらい

子どもの姿と保育者のかかわり

・午睡後、A児は床にすわって他児と保育者のやりとりをじっと見ていた。近くにいた B 児が立ち上がった姿を見て、保育者が「♪あんよはじょうず！♪」と歌いながらパチパチと拍手すると、…

環境の構成

・「つかまり立ち」や「伝い歩き」が自由に安全に出来る場所を設定する。…

主に身体の動きにかかわる環境の構成

経験している内容

◎一歩、一歩、バランスをとりながら歩

主に身体の動きにかかわる内容は◎で示す

指導・援助の要点

・歩き始めには個人差があるので、どの子どもにも「伝い歩き」を十分に行なわせ、自分から「床立ち」をする時期をじっくり待つようにし、…

発達に応じた指導・援助のポイント

家庭との連携の要点

・我が子の「はじめの一歩」は保護者にとって大変意味深いことであるので、その兆しが見えた時には時期を逃さ…

家庭と連携して子どもの生活を支えるための助言、情報提供等のポイント

① 保育園0歳児（12か月頃） 「はじめの一步！できたよ。パチパチ」

これまでの様子

- ・A児は、伝い歩きもスムーズで、時折片手支えで立ったり自分で床から立ちあがったりする姿が見られる。
- ・担当の保育者の姿を見ると、自分からははいはいや伝い歩きでそばに寄って行き、喃語で話しかけたり、顔を見て笑いかけたりすることが多くなってきている。

ねらい

○大好きな保育者に向かって、自らの力で一步を踏み出す。

子どもの姿と保育者のかかわり

- ・午睡後、A児は床にすわって他児と保育者のやりとりをじっと見ていた。近くにいたB児が立ち上がった姿を見て、保育者が「♪あんよはじょうず！♪」と歌いながらパチパチと拍手すると、A児もニコニコしながら一緒に拍手をする。
- ・保育者がA児に向かって「Aちゃんもパチパチしたのね。うれしいね」と言葉をかけると、さらに手をたたき、身体全体で喜びを表す。
- ・直後に、A児が床にしっかり手をつき「ヨイショ！」とばかりにひとりで立ち上がり、少しひざを曲げたり伸ばしたりしてバランスをとっている。
- ・保育者が「Aちゃん、タッチが上手にできたね」とほめて拍手をすると、それを見て、立ったままで自分でもパチパチと手をたたく。
- ・すぐ近くにいた保育者が「Aちゃんおいで…」と言いながら、A児を迎え入れようと両手をぐっと前に差し出すと、そちらに向かって一步、また一步と、全身を使いながら慎重に片足ずつ前に進む。
- ・A児が保育者の差し出した手にたどりつくると、保育者は今にも尻もちをついて崩れそうなA児の身体を支えて膝に抱き上げ、顔を寄せながら「Aちゃん、あんよできたねえ」と言う。
- ・A児は保育者の両手をグイっとつかんでパチパチさせようとする。保育者が「あっ！？じょうず！じょうず！って、パチパチするのね」と言って拍手すると、ニコリと笑顔になる。
- ・周りの保育者もパチパチと拍手すると、一緒にいた他児もパチパチと手を合わせて拍手している。
- ・それを見たA児は、さらに笑顔で一緒にパチパチと拍手し、大満足の様子だった。



環境の構成

- ・「つかまり立ち」や「伝い歩き」が自由に安全に出来る場所（周りに玩具等がなく、手の届く位置に、落下しそうなものや危険なものがない）を設定する。
- ・「床立ち」を一人でしようとする場所（平坦で障害物がないスペース）の安全を確認する。
- ・転倒なども考えられるので、他児との間に空間をとり、「ひとり歩き」が出来るようにする。

経験している内容

- ・パチパチと拍手することが、相手が自分を承認したり賞賛したりする動作であり、自分にとっては快感情（上手、できた、うれしいなど）を表す動作であることを感じてやってみようとする。
 - ・楽しい雰囲気の中で保育者や他児と一緒にパチパチと拍手する動作が楽しいと感じる。
 - ・同年齢の子どもと保育者のやりとりを見て、自分もやってみようとする。
 - ・保育者が自分に向かって声をかけていることが分かり、大好きな保育者のもとに行こうとする。
- ◎「伝い歩き」「床立ち」を繰り返す。
- ◎一歩、一歩、バランスをとりながら歩く。
- ・自分で歩けたことを喜び、保育者や他児が言葉だけでなくパチパチと拍手をして受け入れ賞賛してくれることをうれしいと感じる。

指導・援助の要点

- ・子どもの目線で誘ったり迎え入れたりする。
- ・安全で活動しやすい環境を整え、転倒には十分に気をつける。
- ・歩き始めには個人差があるので、どの子どもにも「伝い歩き」を十分に経験させ、自分から「床立ち」をする時期をじっくり待つようにし、歩き始めたら、大好きな保育者のもとに安心して向かっていけるよう、ゆったりと温かく見守る。
- ・体調や機嫌の良い状態の時を見計らって、歩行に誘う働きかけを行う。
- ・「あんよできたね」と歩けたことを受け止め喜ぶ言葉だけでなく、パチパチと拍手をするという行動にも表して認め、次への意欲につなげていく。

家庭との連携の要点

- ・歩行が始まると行動範囲が広がるので、転倒に気をつけ、床や手の届く所に危険な物を置かないなど、安全な環境で過ごすための具体的な視点を知らせる。
- ・「伝い歩き」「歩行の開始」などの運動発達には個人差があることや、「はいはい」「伝い歩き」を十分に経験し自分から「床立ち」することが、「歩行」へとつながっていくことを知らせ、それぞれの子どもの「今の発達状況」を園と家庭とで共有できるように具体的に伝える。また、「自らの力で歩き出す大切さ」を伝え、楽しみにゆったりと待てるよう助言する。
- ・我が子の「はじめの一歩」は保護者にとって大変意味深いことであるので、その兆しが見えた時には時期を逃さず様子を伝え、保護者が我が子の成長ぶりを目の当たりにして喜びを実感できるように配慮する。

② 保育園 1 歳児(おおむね 1 歳 6 ～ 8 か月)

「まねっこしてみよう」

ねらい

○保育者とまねっこ遊びをしながら、様々な体の部位を自分で動かして遊ぶ。

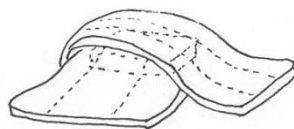
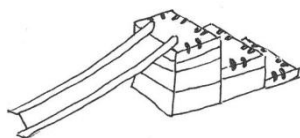
子どもの姿と保育者のかかわり

- ・保育者が巧技台のふたにはしごをかけたり、巧技台を組み合わせる階段やすべり台を作ったり、マットを山のように重ねたりして、室内に身体を動かして遊ぶ場を作る。
- ・遊ぶ場ができると、見ていた子どもたちはそれぞれに興味のある場所で遊び出す。
- ・はしごの場所では、立ってはしごの枠を一つずつ慎重にまたぎながら渡ることを繰り返す。
- ・はしごの枠の中に座り込み車を運転しているようなしぐさをしている子どもに、保育者が「バスの運転手さんね」と声をかけると、他児も興味を示し、同じ様にはしごの枠の中に座り込む。
- ・保育者も中に入り「どうぶつえんバスです。発車します。ブーブー」と言って運転するしぐさをすると、そばにいた子どももはしごの枠の中に入り、座り込む。
- ・保育者が「さあ、どうぶつえんに着きましたよ」と言いながら、はしごから出て重ねたマットの前に行くと、一緒について来る。
- ・保育者が「ここはおサルさんのお山です」と言いながらマットの山に登ってみせると、同じように立ったまま、はいはいでなど、それぞれの登り方をし、下るときも、立ったまま、お尻で滑りながら、転がりながらなど、それぞれの下り方をする。
- ・巧技台の階段では、立って、はいはいしながらなど、個々の登り方をする。
- ・保育者は、はいはいして登っている子どもには「今度は、立って登ってみよう」と手をつないで登らせる、滑り台で前向きに座って滑ったり腹ばいで滑ったりするなど、個々の動き方を見ながら、子どもが自分でしているという気持ちをそこなわれないように気をつけて手を添えたり声をかけたりする。
- ・しばらく繰り返した後、保育者が「この橋の下にはワニさんがいます、食べられないようにはしごに乗って渡ってね」と声をかけると、はしごの枠を握りながら四つん這いになって渡る、キャーキャーと声を出しながら急いで渡ろうとする、はしごのそばでははいはいしながらワニになったつもりでいるなど、その子なりの動きが見られた。



環境の構成

- ・ 経験させたい動きが引き出せるように、遊具を組み合わせで設定する。
(巧技台の蓋、はしご、マット、巧技台 (30 cm)、巧技台 (60 cm)、滑り台)
- ・ 個々の子どもの動きがぶつからないように、スペースを空けて設定する。



経験している内容

- ・ 興味のある場所を見つけて自分なりにやってみようとする。
- ◎歩く、またぐ、登る、転がる、滑る、這う、握るなど、全身の部位を動かして遊ぶ。
- ・ 保育者や同年齢の子どもに関心を持ち、信頼できる大人に見守られながら、同じことや簡単な動きのまねをして一緒に遊ぶことのうれしさを感じる。
- ◎保育者や同年齢の子どもとまねっこ遊びをすることで、その子なりにいろいろな身体の部位を繰り返し動かして遊ぶ面白さや心地よさを感じる。

指導・援助の要点

- ・ それぞれの子どもの動き方の違い (個人差) に配慮しながら、一人一人がじっくりと安心して動けるように、スペースをあけて場を設定する。
- ・ 設定した場所には、保育者が付いて危険のないように見守り、子どもの動きに応じて手を添えたり、高さを変えたり揺らしたりしながら援助をする。
- ・ 子どもが偶発的に示した動きをくみ取ったり、保育者や他児をまねてやりたい気持ちを受け止めたりしながら、動きに言葉や擬音を添えて意味付けたり場の整理をしたりしていく。
- ・ 主担当保育者が遊びをリードしやすいよう、他の保育者は個々の子どもに応じた援助をするなどのサポートを心がける。

家庭との連携の要点

- ・ この時期の発達には、「これまで大人にしてもらっていたことを自分でしようとする、指さしや身振りなどの身体表現を伴った片言で自分の意思を親しい大人に伝えようとする、盛んに模倣をする」などの特徴があり、個人差が大きい時期でもあることを説明する。
- ・ 新たな身体の使い方や発語、喜んで繰り返した動きなどを個々の保護者に具体的に伝えて、一人一人の発達に合わせた対応をすることの大切さを伝える。
- ・ 自分でやってみたがる時期なので、特に身支度や食事など、時間や気持ちに余裕をもって、子ども自身でやってみる機会を奪わないよう接するなどの配慮の大切さを伝える。

③ 保育園 2 歳児 (9 月) 「跳んでくぐってジャンプしよう」

ねらい

- 走る、跳ぶ、くぐるなど、全身を繰り返して動かして遊ぶことを楽しむ。
- 保育者や友達とのかかわりの中で、みんなと同じ動きをして遊ぶことや言葉のやり取りを楽しむ。

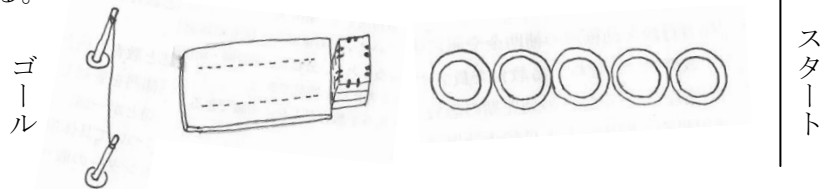
子どもの姿と保育者のかかわり

- ・保育者が園庭に手作り輪や巧技台、マット、くぐるためのゴムひもを用意し、身体を動かして遊ぶ場を設定する。
- ・すぐにそばにやってきて手を出しそうになる子どももいるが、「できあがるまで、もう少し待っててね」という保育者の言葉にうなづき、見ながら待っている。
- ・保育者が「さあ、今日は探検にいこう」と言うと、「やったあ」と声を上げる。「〇〇も行く、ぼくが先!」と待てずに前へ出てくる子どもに対しては「待っててね、お名前を呼んであげるからね」と具体的に名前を挙げて声をかけると、理解して待つことができる。
- ・新しいことに抵抗を感じている子どももいるが、「おもしろそうね、やってみようか」と保育者に促されると、ゆっくりと自分から動き出す。
- ・初めは、スタートラインから少し離れたところに輪を並べたが、走りだして輪のところまで行っても止まり切れない子どももいたので、輪をスタート地点に設定し直すと、動き方がはっきりわかり、ピョンピョンと跳び始める。気持ちがせいて並んでいる輪を順番に跳べない子どもには、「ゆっくり一つずつ跳ぼうね」と声を掛けると、動きがゆっくりになり、一つずつ輪を確かめながら跳ぶようになる。
- ・巧技台では、高いところまでよじ登ることができた心地よさを意識して、思わず手を振る子どももいる。保育者に「登れたね、高いね」と共感してもらい喜ぶ様子が見られる。30cmの高さの跳び下りがまだ不安定な子どもには、保育者がそっと手を添えながら跳び下りた感覚を味わわせていく。
- ・ゴムのところまで来ると、スピードを落としておじぎをするように頭を低くし、ゆっくりくぐりぬける。「できた…」と後ろのゴムを振り返りながらつぶやく子どももいる。
- ・他児の動く姿が見えるように横一列に待つ場所を設定すると、やっている友だちに関心を向け「〇〇ちゃんがんばれー」と声援を送る姿が見られ、一通り終わって保育者から「すごいね、がんばったね」と声をかけられ、うれしそうな表情を見せる。



環境の構成

- ・自分で身体を動かして循環しながら遊べる場を、跳躍力や歩幅に合わせて手作りした可動式の遊具（ボール紙の輪やゴムひもなど）や巧技台等を組み合わせて設定する。
- ・事前に危険のないよう園庭整備、用具の点検を行い、それぞれの位置に保育者が付く、着地場所にマットを置くなど、安全に配慮する。



経験している内容

- ◎設定された場に応じて身体を動かす。
 - ・保育者から声をかけられ、前の子どもの動きを見て自分の順番が来るのを待つ。
- ◎様々な遊具や用具に触れながら、全身を使って動くことを楽しむ。
- ◎両足でジャンプする、よじ登る、跳び下りる、くぐるなど、保育者や他児の動きを真似て様々な身体の部位を動かしながら遊ぶことで、身のこなし方を体感していく。
 - ・保育者や友達と同じ場で一緒に同じような動きをすることのうれしさを感じる。
 - ・自分が動いた達成感と保育者に認められ褒められることの心地よさを感じる。

指導・援助の要点

- ・走る、止まる、登る、降りる、跳ぶ、くぐる等、全身を無理なく動かしながら、徐々に自分の体の動きをコントロールする体験ができるように、遊具や場の配置を考えて設定する。
- ・保育者や友達とかかわりながら遊ぶ喜びや楽しさが感じられるように、他児の動きが見えるように待つ位置を設定したり保育者が仲立ちをして一緒かけ声をかけたりする。
- ・巧技台は当初30cmの高さで設定するが、足に負担がかからないよう高さを調節するなど、個々の経験や動き方に応じて援助し、見守ったり助言したり手を貸したりすることで、最後までやりきった達成感や満足感を味わわせながら、もっとやりたいという気持ちにつなげていく。

家庭との連携の要点

- ・今の時期の子どもの姿（生活や運動面でできるようになってきたこと、言葉の発達がめざましいことなど）を伝えるとともに、「行動範囲が広がって探索行動が盛んになり、簡単なごっこ遊びを楽しむようになるが、何でも自分でやってみたい思いとまだうまくできない行動の不一致が多く見られ、強く自己主張するようになる」などの2歳児の発達の特徴を知らせる。そして、危険なことではなければ「自分でやりたい」気持ちを大切に受け止めて時間をかけても経験させること、さらにできたことを認めてほめることの大切さなどを折りにふれて伝えていく。
- ・家庭での生活では日常的に歩く事が少ない傾向が見られるので、保育園での日常の散歩コースや距離等を具体的に伝え、親子での散歩をするよう勧める。

④ 幼稚園3年保育3歳児（10月下旬）

「見て見て！こんなことができるよ！」（自分なりの挑戦）

これまでの様子

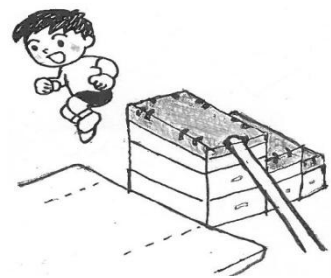
- ・幼稚園に入園したばかりの3歳児には、それまで家庭でどのように過ごしてきたかによって、遊びや生活のあらゆる場面で経験の違いが見られる。特に運動面での経験の違いは大きく、家庭で保護者と静かに過ごす時間が多く公園で遊んだ経験が少ない子どもの場合、地面が平らな園庭でもすぐに転ぶ、築山を一人では登れない、しゃがめないなど、身体の動きが全体にぎこちない傾向がある。
- ・保育者はこれらの実態を踏まえ、1学期から安心して過ごせる保育室に低めの巧技台やビームで場を作り、「忍者の修行！ニンニン」などと忍者やヒーローのイメージで跳んだりくぐったり渡ったりできるようにしてきた。「僕はしない」「こわい」とやりたがらない幼児に対しては、保育者も一緒に遊び、様子を見ながら誘うようにした。

ねらい

- いろいろな動きを、自分なりに繰り返し試す楽しさを味わう。
- 友達の真似をしたり一緒に動いたりして、かかわりを喜びながら遊ぶ。

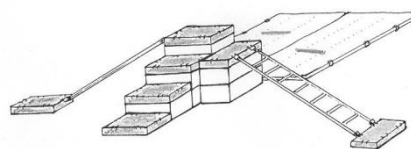
子どもの姿と保育者のかかわり

- ・10月下旬、さらに大きな動きも引き出せるように、園庭に巧技台のジャンプ台を設定する。運動遊びが好きな子どもは「見てて！」と、どこまで遠くに跳べるか試したり「こんなこともできるよ」と回転しながら跳んだりして、自分なりの動きをする姿が見られた。さらに、「はしごも出して」「もっと高くして」などと挑戦したいという思いを表す子どももいる。一方で、「まだこっちは(高いから)できない」「せんせい、来て！」と、保育者の手を借りようとする子どももいる。
- ・そこで、階段・ビーム・はしごの3種類を放射状に取り付けて横に低めのジャンプ台も設定し、それぞれの子どもが自分でやってみたい場所を選べるように組み合わせ、いろいろな動きを試せるようにする。さらに、マットに3段階のラインを引き、だんだんと遠くまでジャンプできるようにした。
- ・すると、「せんせい、見てて！」と保育者の手を借りずにやってみる、「次はこっちから！」と自分がやってみたいコースを選ぶ、「もっと向こうまで行くぞ！」とラインを越えることを目指すなど、それぞれが自分なりに挑戦する姿が見られた。
- ・保育者は一人ひとりの動きに合わせて「ヨイショ、ヨイショ」「ピョーン」とかけ声をかける、ヒーローや忍者になりきっている子どもには「忍法！〇〇の術！」と唱える、「すごい、さっきより遠くまで跳べた！」など、個々に挑戦しているところを具体的に認めながら見守った。
- ・次第に、友達の動きを真似して同じようにやってみる、隣のジャンプ台に友達が来るのを待って「せーの！」と一緒にタイミングでジャンプするなどの動きも見られるようになった。



環境の構成

- ・保育室内にいても園庭の保育者や他児の動きがよく見え安心できるような場に設定する。
- ・経験差のある子どもも自分で選んで取り組めるように、2段階の高さのジャンプ台（50cmと70cmの高さの台を横並びに並べる）を用意する。
- ・それぞれの子どもが「自分にもできた」という喜びや「今度はこれをやってみよう」という気持ちをもてるように、種類の異なる階段状の巧技台、ビーム（丸い方を上に向ける）、はしごなどを放射状に設置する。
- ・「もっと遠くまで跳んでみよう」など自分なりのめあてをもてるように、マットにガムテープでラインを引く。



経験している内容

- ◎戸外で身体を動かして遊ぶ解放感を味わう。
 - ・自分ができるようになった動きを繰り返す心地よさや、保育者に認められるうれしさを味わう。
- ◎跳ぶ、バランスをとりながらはしごを渡る、腕の力で登るなど、自分なりにいろいろな動きに挑戦する面白さを感じる。
- ◎自分なりのイメージをもち、なりきって身体を動かすことを楽しむ。
 - ・友達がしている動きに関心をもち、同じ動きを真似してやってみる。
 - ・友達と声をそろえたり一緒に動くタイミングを合わせたりする心地よさを味わう。

指導・援助の要点

- ・個々の経験差を考慮し、それぞれの子どもが自分なりの試しができ、且つ「できた」という満足感が味わえるように難易度に段階を付けた多様な場の作り方をする。
- ・一人ひとりの動きを十分に受け止め、「ピョン」「よいしょ」など子どもの動きに合わせた言葉を添えたり、なりきっているイメージに添った言葉かけをしたりしながら、安全に配慮して見守っていく。
- ・興味関心をもって一定期間継続して楽しめるように、様子を見ながら少しずつ高さや組み方を変えたり動きの種類を増やしたりして、子どもの意欲が持続するようにする。

家庭との連携の要点

- ・特にこれまで運動遊びに消極的だった子どもについては、保護者に日々の取り組み方の変化を具体的に伝え、子どもが今「経験している内容」や「ちょっと難しいことにも挑戦しようとする意欲を受け止めることの大切さ」についての理解を図り、共に子どもの成長を喜び合う機会とする。
- ・学級懇談会の機会や掲示物などで、子どもたちが遊んでいる様子の写真や映像を示しながら、幼児期に全身を使って様々な動きを経験することの大切さを伝える。

⑤ 保育園 4 歳児 (1 1 月) 「ボール遊び、やってみると楽しいね」


これまでの様子

- ・ 2 歳児までは、保育室にあるボールにかかわって、「ころがす」「(ころがるボールを) 追う」「(ボールをころがして) 物に当てる」などの動きは見られたが、3 歳児になってからのボールとのかかわりは園庭でボールを両手で投げ上げる程度にとどまり、あまり積極的ではない幼児が多い。

ねらい

○ 様々なボールの扱い方を知って、自分なりにボールを使った遊びを楽しむ。

子どもの姿と保育者のかかわり

- ・ ホールに学級全体 (20 名) で集まる。保育者がボール遊びをしたことがあるかと聞くと、「ある」「できる」などと答える。保育者が「みんなボールを投げるのが上手なんだね。でも今日はいつもとちょっと違うやり方でやってみるよ」と言い、それぞれにボールを渡す。
 - ・ 保育者が「まず、みんながボールと仲良しになるように、『大事に使うからね』ってなでてあげよう。よしよし」と少し大げさにボールをなでる。子どもたちは、「よしよーし、可愛いね」などと口々に言ってボールをなでる。
 - ・ 床に置いたボールをはじめは両手で横からつかむ。次に上から両手でつかむ。ゴム製の柔らかいボールなのでほぼ全員が簡単につかむことができた。保育者が「みんなできたね。では、これはどうかな」と言いながら、片手(左右片方ずつ)でつかむ。はじめは難しそうにしていた子どもも、「こっちならできる」と利き手でつかんで見せる。
- 
- ・ 座った状態で足で輪を作り、その中にボールを落とし、はずんだボールを両手でとる。座ったままボールを手でついている子どもの姿を保育者が認めると、全員が同じようにボールをつこうとする。
 - ・ 立った状態でのボール落としをする。保育者が「足と足の間に自分しか見えないシールを貼ってみよう」と声を掛け、床の両足の間にシールを貼るふりをしてその場所にボールを落としてみせると、徐々にまっすぐにボールを落とすことができる子どもが増えた。
 - ・ まっすぐ落ちるようになった様子を見て、保育者が「はずんできたボールをついてみよう」と声をかける。ボールを勢いよくはずませて声を上げる、ボールを前の方に落としてつこうとする、上に放り投げて大きくはずむボールをつこうとするなど、様々な動きが見られるが、その場で止まってボールをつける子どもはあまりいない。
 - ・ 保育者は「力があるね、すごい」「もう一回やって」などと声をかけ、しばらく自由につかせてから「今度は(シールを貼るふりをして)ここにできる？」とボールを落とす場所を知らせる。
 - ・ 保育者は子どもたちそれぞれの姿を見ながら、つくことができるようになった子どもには「顔の前からやってみよう」などと、ボールを落とす高さを変えてみるよう個別に声をかける。その様子を見て、真似をして高さを変える子どももいる。
 - ・ 保育者が、左右片方ずつつく、足をあげてボールをくぐらせるなどの方法を見せ、「みんなもだんだんこんな風に見えるようになるよ」と言う。
 - ・ その後、「もっとボールで遊びたい」と園庭での自由遊びの時間にボールを使う子どもが増えた。

環境の構成

- ・ボールがころがってもあまり遠くにはいかず、一人一人の動く空間がある程度確保できるホール(室内)で行う。
- ・できれば子ども一人に一つのボールを準備する。
- ・初めは片手でもつかめるくらいの柔らかめのゴムボールを使う。(直径12cm～16cm程度)

経験している内容

- ・ボールの感触を知り、ボールに親しみをもつ。
- ◎ボールをもつ時の腕の使い方やつかみ方による指先の力の入れ方の違いに慣れる。
- ◎ボールを落とすときの腕や指の力の入れ方(力を抜くこと)に気付く。
- ◎座った時の短い距離のねらった場所へのボールの落とし方を知る。
- ◎立った時にボールをまっすぐ落とす落とし方、ボールの動きを最後まで見ることを大事であることを知る。
- ◎ボールを「落とす」と「つく」時の力の入れ方に気付く。
- ◎角度によってボールの弾み方が変化することを知り、目標を決めて落としたり、ついたりしようとする。
- ・ボール遊びの楽しさを知って、自分からボール遊びをしようとする。

指導・援助の要点

- ・ボールの扱いに慣れるまでは、ボールを配る時にころがっていかないように、「こぼれないようにしよう」などと声をかけながら座った状態でそれぞれの子どもが自分の足でつくった輪の中にボールを入れるなど、集中できるように配慮する。ボールに触ってころがってしまったら、「こぼれちゃったから拾っておいで」程度の声をかけ、ボール遊びへの期待をそぐような過度の注意はしない。
- ・うまくいかないことを前提に指導し、子どもの取り組む姿を肯定的に受け止めるよう心がける。
- ・保育者が様々な動きのモデルを見せ、ボール遊びを楽しみに自分からやってみたいと思えるようにする。

家庭との連携の要点

- ・降園時、子どもにも聞こえるように、その日に楽しんでいた様子やがんばったことを保護者に伝え、家庭でもボール遊びを楽しみにしてもらおうようにする。
- ・降園時や保護者会で実演する、学級通信や園だよりで図示するなど、様々な方法で家庭でも可能な範囲で親子で楽しめるボール遊びのやり方を伝える。

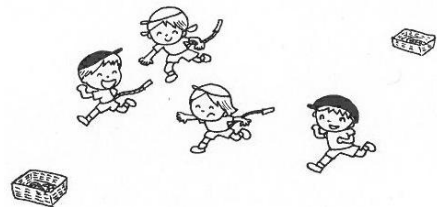
⑥ 幼稚園5歳児(5月下旬～6月中旬) 「こんどはこうやってみよう(しっぽとり)」

ねらい

○ルールのある集団遊びに自分なりのめあてをもって繰り返し取り組み、思い切り身体を動かす。

子どもの姿と保育者のかかわり

- ・進級後の5月下旬、新たな集団遊びとして『しっぽとり』を導入し、2つのチームに分かれること、しっぽを取られても自分の陣地へ戻りしっぽを付ければ何度でもゲームに参加できること、時間内に何本しっぽが取れるかを競うゲームであることを伝え、初回は室内のホールで、2回目以降は園庭で行う。
- ・「前の大きい組がやってたよ！」と意気込んで取り組むものの、陣地から出てもすぐに自分の陣地に逃げ込む子どもが多かったため、保育者は「しっぽはいっぱいある、すぐにしっぽを取りに戻れば大丈夫。外に出よう！」と励ます。
- ・ゲーム終了の合図で全員が集まる。「こんなにいっぱい取れた!」「Aちゃんがギュってして(体を押さえ込んで)しっぽを取った」など様々な反応がでる。保育者は「何本取れたかな?」「Bちゃんは逃げるのをとってもがんばっていたよね」とそれぞれの幼児の取り組みの様子を認めるようにした。
- ・室内・園庭と繰り返すうちに、「昨日はゼロ本だったけど今日は1本取れた」「明日は〇本取れるようにがんばる」と自分なりのめあてをもつ、逃げることに集中していた幼児がしっぽを取ろうとするようになる、好きな遊びの中でもしっぽ取りに参加する子どもが増えるなどの変化が見られた。
- ・学級全体での取り組みの際「今日は自分が何本取れたかではなくて、取ったしっぽをチームで合わせて多かったチームが勝ち」と新たなルールを伝える。
- ・1回戦終了後、子どもたちはチームごとに取ったしっぽを集め、「1, 2, 3…」と学級のみんなで声をそろえて数え、勝敗が決定すると、勝ったチームは「やったあ!」と抱き合って喜ぶ。



<その後の姿>

- ・2学期中旬、子どもたち同士で声をかけ合って仲間を集め、しっぽや陣地の準備をして“チーム対抗のしっぽ取り”を進めていくようになる。
- ・スタートの合図と同時に陣地から飛び出していく、味方の動きを見てから出ていき、競り合っているところを後ろから素早くしっぽを取る、味方同士で「2人ではさみうちしよう」と目配せして互いに声をかけ合いながらしっぽを取りに行くなど、様々な動きが見られるようになった。

環境の構成

- ・実施する場の広さや条件(室内・外)・チーム間の距離・しっぽの数、しっぽ置き場等は、経験させたい内容や子どもの様子に合わせて変化させていく。

<場の特徴(例)>ホール：限られたスペースなので、相手の陣地が近く互いの動きが見えやすい。

床の方が地面より足がキュッと止まるので、方向転換しやすい。 など

園庭：陣地の間が広いので、思いきり走って逃げる・追い掛ける、回り込むなど様々な動きが出てくる。 など

経験している内容

- ・集団遊びのルールを理解し、学級のみinnでゲームをする楽しさを感じる。
- ◎「もっとたくさんのしっぽを取りたい」など自分なりのめあてをもち、走る、止まる、方向転換をする、体をひねる、素早くつかむ、引っ張るなど、様々な身体の動きをする。
- ・しっぽを取られても何度でもしっぽを付け直して続けられるので、諦めずに自分から挑戦していこうとする。
 - ・周囲の状況をよく見て自分のしっぽを取られないように守りながらも、相手のしっぽを取るという難しさと面白さを感じる。
 - ・同じチームの友達と一緒に声を合わせて数えたり喜びや悔しさを共有したりすることで、チーム意識をはぐくむ。
- ◎同じチームの友達の動きを見て自分の動きを工夫する。

指導・援助の要点

- ・チーム対抗のゲームの形式をとりながらも一人一人のこれまでの経験や動き方の違いに配慮し、「自分で何本しっぽを取れたか」「どういう動きが良かったか」「困ったことは何か」などを取り上げることで、自分なりのめあてを段階的に意識させ、ルールを守りながら自分なりの動きを出せるようにする。
- ・学級全体で取り組む時は、しっぽがあまり取れない幼児もチームとしては勝つ経験もできて、それぞれのチームが勝ち負けのうれしさや悔しさを味わえるよう、両チームの力に配慮してメンバー分けをする。
- ・チームの仲間同士のつながりを感じながら楽しんでいる姿や個々の動きを全体の場で取り上げて認めることによって、個々やチームとしての取り組み意欲を高めていく。
- ・学級全体で経験したことが好きな遊びでも自分たちで進めていけるよう、物や場の環境を整える。

家庭との連携の要点

- ・新たな活動の導入や段階を踏まえたルールの指導について、日々の降園時を利用して伝え、家庭での話題提供をする。
- ・保育参観の観点として「自分なりのめあてをもって取り組む」大切さを伝え、勝ち負けでなく、個々の身のこなしやチーム意識をもって自分なりの動きが出せているかを見てもらう。

小学校第1学年（6月） 体育科 単元「あそぼう どうぶつアスレチック」

（器械・器具を使つての運動遊び領域 跳び箱を使った運動遊び）

これまでの様子

- ・入学前に跳び箱を使って遊んだ経験は児童によって差がある。6段以上の幼児用の跳び箱を開脚跳びで跳ぶことができる児童がいる一方、跳び箱に初めて触れる児童もいる。
- ・腹ばいになって自分の身体を両腕の力だけで移動することができない児童がいる。床や台に手をつく時、手がパーにならない児童も数名いる。

ねらい

- 跳び乗りや跳び下り、両手をついてのまたぎ乗りや跳び下りなどの動きができるようにする。
- 順番やきまりを守って、友達と仲よく運動する。
- 器械・器具の準備や後片付けを友達と一緒にしたり、使い方や置き方などの場の安全に気を付けたりして運動する。
- 運動遊びの行い方を知り、楽しく遊ぶことができる場所を選んだり、友達のよい動きを見つけたりすることができるようにする。

環境の構成

- ・腕で身体を支えるなどの動きを経験するため、身体の動きに動物の名前をつけて補助運動を行う。
 - アザラシ；腹ばいになって両腕を床について、腕の力だけで前進する。
 - クモ；両手足を横に伸ばして腹ばいになり、両手足を動かして前進する。
 - イヌ；両手足を床について、膝と肘を伸ばして前進する。
 - カンガルー；両足をそろえて踏み切り、高く跳び上がる。
 - ウサギ；しゃがんで両手を少し前方につき、前方に体重を移動しながら足をあげて跳ぶ。



- ・片足で踏みきって跳び乗る、ジャンプして跳び下りる、両足で踏み切り手をついてまたぎ乗るなど、跳び箱を使った動きができる場を、適当な間隔をあけて体育館に設定する。

児童の活動

- ・親しみのある動物の動きをイメージして補助運動を行う。
- ・跳び箱、マット、踏み切り台等を組み合わせて設定した4か所それぞれの場でする動きを確認する。「早くやりたい」など言いながら、跳び箱を使った遊びを楽しみにしている。
- ・4、5人のグループに分かれ、4か所を順に回る。
- ・両足踏み切りをする場で、教師が「カンガルーで跳び箱に乗ろう」と声をかけると、「両足でぴよんだね」と動きのイメージを確認してから、跳ぶ姿がある。

- ・同じグループの友達と一緒に動きながら、「○ちゃん、跳ぶ時に足がきれいにそろっていたよ」「□ちゃん、もう少し前の方に手をつくといいよ」などと友達の動きを見て、友達の良いところを見つけて声をかけ合ったり、気が付いたことを教え合ったりする。
- ・前の人がまだ跳び箱の上にいるのに走りだそうとする児童がいると、「あぶないよ。前の人がいなくなってからだよ」と、授業のはじめに教師が確認した約束を友達に教える。
- ・振り返りの時間、教師が「跳び箱をしてみて『今度はこうしたい』と思ったことはありますか」と問いかけると、「今日のはうまく跳べなかったから、休み時間に校庭のタイヤでやってみよう」「今度は(跳び箱の高さを)もう少し高くしてください」などの声があった。

指導・援助の要点

- ・親しみのある動物の動きをイメージすることで、入学前までに体験した運動の内容や量にかかわらず、どの児童も具体的な動き方に見通しをもち、取り組みに意欲的になるようにする。
- ・「できる、できない」を前提に取り組みを始めるのではなく、「グループのみんなで跳び箱を使った身体の動きを楽しむ」などのめあてを提示して、経験がある児童があまりスムーズでない動きをする児童に動きのこつを教える、一人一人の動きから良くなったことを互いに見付け合うなどのかかわりをしながら全体の動きや理解が高まっていくようにする。
- ・跳び箱などの場の設定は、はじめは教師がするが、慣れてきたらグループで分担して場を設定したり片付けをしたりするようにする。
- ・一人一人の姿から取り組みの態度や動き方の良くなったところを見取って認めるとともに、踏み切りのタイミング、跳び箱につく手の位置などについて「こうするともっとよくなるよ」と具体的にアドバイスすることで、児童の意欲が高まり、楽しんで活動できるようにする。

家庭との連携の要点

- ・保護者会、学級通信など様々な機会に、跳び乗る、跳び下りる、またぎ乗るなどの動きは、跳び箱に限らず姿勢の保持、バランス感覚などにつながる基本的な動きであり、生活行動を自分自身の力でコントロールしながら進めていく上で必要不可欠なことを伝え、家庭でも日常生活の中で楽しみながら、繰り返し体験できる機会をつくるように伝える。

(2) 接続期における取り組み（生きる力の基礎を培う3つの視点から）

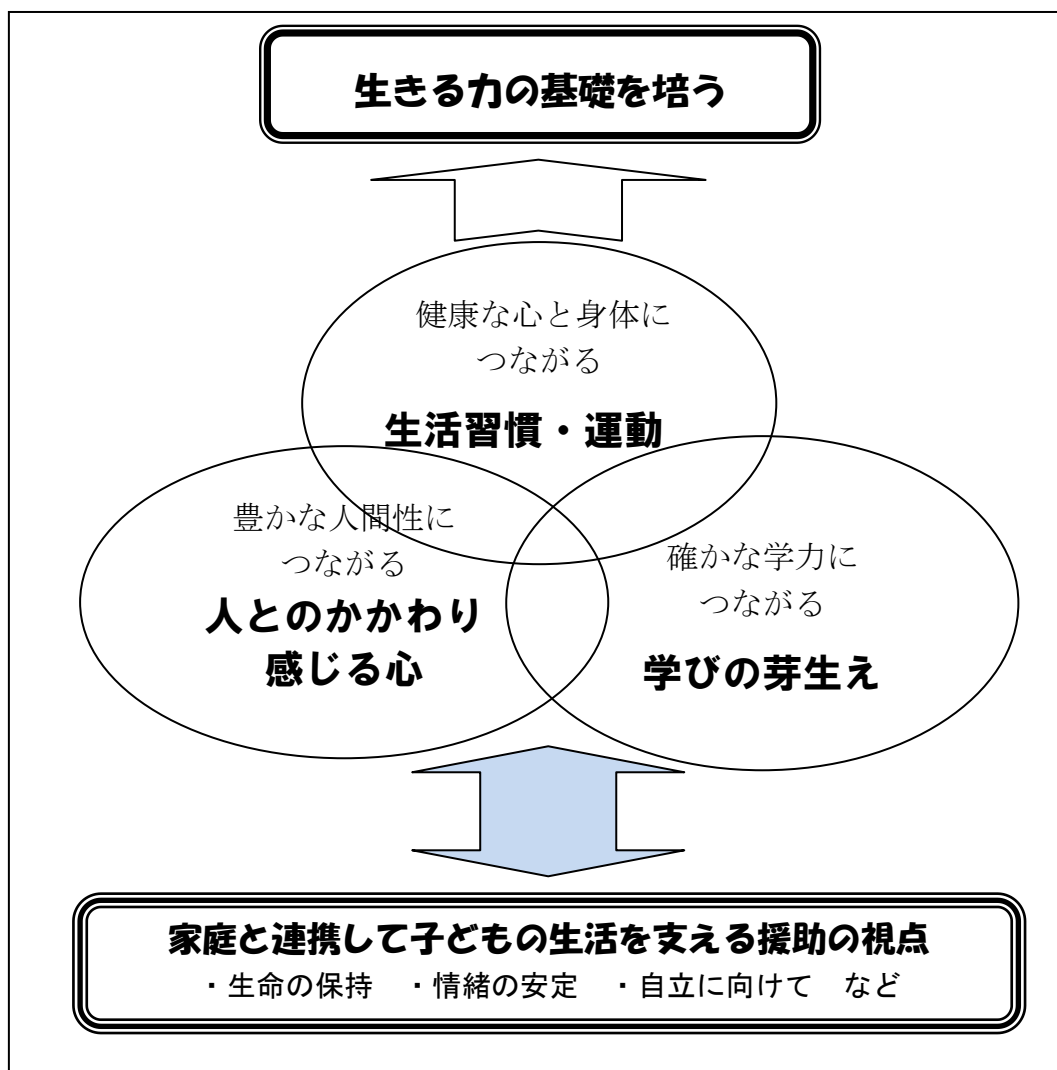
就学前教育と小学校教育との接続

中野区においては、就学前3年間に幼児の95%以上が集団生活を体験して小学校に入学している。(2009 図表1 再掲 p.3) また、区立小学校8校の小学校第1学年学級担任への聞き取り調査の結果では、「就学前の集団生活を通して社会性の基礎が培われていると感じる子どもの割合」は8割強である。(2011, 2012 中野区幼児研究センター調査 再掲 p.4)

しかし、保育園・幼稚園等での生活と小学校での生活の仕方の違いから、小学校入学時に集団行動や学習規範について個別に指導が必要な子どもが若干ではあるがいる。また、保育園・幼稚園等と小学校との「指導観」や「学習内容の評価の観点」の違いから、就学前教育で積み重ねられてきた経験を小学校生活の中でどのように発揮したらよいか戸惑いを感じる子どもの姿が見られることもある。

一方、小学校で指導する立場からは、就学前に幼児教育関連施設で集団生活を体験してきた内容が多様であり、生活習慣、人とのかかわり方、小学校での学習に対する関心、意欲、態度には大きな個人差があり、それぞれの子どもが就学前に積み重ねてきた経験を学校生活の中で生かすことの難しさを感じる人が多い。

本プログラムでは、就学前教育と小学校教育との接続の手掛かりとなるよう、「発達に応じて確実に経験させたい内容」を「生きる力の基礎を培う」3つの視点でまとめた。



ここでは、この3つの視点から就学前及び小学校での接続期の指導事例を取り上げた。発達に応じた指導内容及び指導方法の違いとともに、「ねらい」の内容や達成する課題のとらえ方などに表れる指導観の違いを改めて見直し、発達と学びの連続性を踏まえた「指導の連続性」のあり方を検討し、接続にあたっての就学前及び小学校それぞれでの指導を工夫していく際の手掛かりの一つとして活用されたい。また、今後、本プログラムで提示した「確実に経験させたい内容」についてより具体的なレベルでの理解の共有化を図り、中野区の就学前教育の新たな一歩を踏み出すきっかけとなることを期待したい。

なお、現時点では、指導・援助の考え方すなわち「指導観」には就学前教育、小学校教育それぞれの視点があり、その指導観に基づいて進められる家庭との連携にも就学前教育、小学校教育それぞれの視点があると考えられるので、事例の項目を「指導・援助の視点」「家庭との連携の視点」とした。

① 「学びの芽生え」から「確かな学力」へ

幼稚園2・3年保育5歳児(11月) 「みんなでわけよう(園庭のヒメリンゴの収穫)」

これまでの様子

- ・進級してから、園で様々な野菜や果実を育てて収穫し、学級のみinnで分け合って食べることを繰り返してきた。わずかな量でも、薄く切って全員で分けたり親子と一緒に食べたりすることで、幼児の中に「みんなで同じものを一緒に食べるとおいしい」という気持ちが育ってきた。
- ・6月のカレーパーティーでは、学級のみinnで自分たちが収穫したジャガイモやニンジン・タマネギを使って調理したカレーを3・4歳児にごちそうし、「ありがとう」と言われて、感謝されるうれしさを味わった。それ以降、「採れたものや作ったものは3・4歳児にも配ろう」という気持ちももつようになった。
- ・お店屋さんごっこをして遊ぶ中でお客さんや商品の数を数えたり、しっぽとりをする中で自分たちでしっぽの数を数えて勝敗を決めたりするなど、数量に関心をもつ姿が見られるようになってきた。

ねらい

○友達と一緒に活動する中で共通の目的を見だし、思いや考えを出し合ってやり遂げようとする。

経験している内容

- ・園でできたヒメリンゴを食べることを楽しみに収穫する。
- ・収穫したものの匂いや色、大きさの違いなどに気付き、自分なりの言葉にする。
- ・3・4歳児の食べたいという気持ちを受けとめて、分けてあげようという思いをもつ
- ・どうやったらみんなで分けられるか、これまでの経験を思い返しながら考える。
- ・友達の考えを聞いたり、そこから思いついた考えを伝えたりして、一緒に考えようとする。
- ・必要に応じて繰り返し数えたり、分けたりしながら、数に対する関心を深める。
- ・自分たちで3・4歳児に届け、感謝される喜びを味わう。

取り組みの姿

- ・11月に入り、園庭のヒメリンゴが色付き始めると、5歳児は「食べていい」「まだだよ」「もっと赤くなってからだよ」、「さくら組(4歳児)やすみれ組(3歳児)の分はないみたい」「じゃあ、どうしよう」「ほし組(5歳児)だけで食べちゃう」「それはかわいそうだよ」などと、思い思いのことを言いながら楽しみにしていた。
- ・数週間して、ヒメリンゴが赤くなっていることに気付いた子どもが、「先生、そろそろ採れるよ!」と知らせに来る。そこで、5~6人の子どもと収穫することにする。
- ・「あっちにもあるよ」「もっと手を伸ばして」と、友達と知らせ合って収穫し、「ちょっと食べてみようか」「まだ、だめ」などと言いながら、採れたものをかごの中に集めていく。
- ・収穫しながら、「いいにおいがする」「リンゴのにおい?」とおいをかいだり、「これは大きい」「こっちは赤ちゃん」などと大きさを見比べたり、「みて、これ真っ赤」「こっちはちょっと黒っぽい」「これは少し青いよ、まだだったかな」と色を比べたりする。
- ・様子を見ていた3歳児に見せようと手渡すと、3歳児が思わずかじってしまい、「あっ、食べちゃだめだよ」「洗ってないのに」「みんなの分だからね」と、あわてて止める姿もあった。保育者が「おいしそうだから思わず食べちゃったのね。食べたくなっちゃうよね」と言うと、「そうか、やっぱり小さい組だって食べたいんだ…」とつぶやく子どもがいる。その声を聞いていた他の子どもは、その後「見

るだけだよ」「後であげるからね」と丁寧に説明しながら見せている。

- ・最後まで収穫していた5人が3・4歳児の保育室にヒメリンゴがとれたことを知らせに行く。3・4歳児が「リンゴだ」「食べられるの」などと興味を示すと、5人は「今は見るだけね」「後であげます」などと言って見せる。
- ・5人で分け方を考えることになり、それぞれがかごの中のリンゴを指さし「1、2、3…」と数え始める。しかし、「50個」「ちがう、55個」「ああ、もう分かんなくなっちゃう」と数が合わない。
- ・保育者が「みんながバラバラに数えたら分からなくなっちゃったのね」「カゴから出してみたら？」と声をかけると、「じゃあ、外に出そう」と、長く1列に並べ始める。
- ・全部を1列に並べ、また数え始める。今度は「1、2…」と、みんなで一緒に声を合わせて数える。しかし、「あれ、今、何個だった？」「よく分かんなくなっちゃう」と何度も数え直す。
- ・保育者が「10個ずつの列にしてみたら」と声をかけると、「そうか、それなら数えられるかな」「やってみよう」と、「1、2、…10。次こっちに」と並べ替えていく。全部並べると、「先生、10個が4つとあと6個も採れたよ」「それって、46個ってことだよ」と喜ぶ。
- ・保育者が「みんなの分があるかな…」と、各学級の人数を○で示した表を見せると、表に合わせてヒメリンゴを並べ直すが、足りなくなってしまう。「どうする？」「すみれ組（3歳児）は今度にする？」「でも、もう1個も採れないと思うよ」などと、思い思いの考えを言うが、解決策が浮かばない。
- ・保育者が「足りないけど、みんなで分けたいね」と言うと、「柿の時みたいに切って分ければ」と思い付き、他の子どもも「いいね」「包丁で半分に切れればいい」と数え直す。
- ・ヒメリンゴ1つを2人分として数え直すと、全員分あるうえに数個余る。「これはどうする？」「おかわり用のおまけにしよう！」と数個ずつ余分に分け、それでも余ると「残りは、ほし組（5歳児）のにしよう。だって、一番人数が多いもの」と笑顔で顔を見合わせ、自分たちの学級のかごに入れる。
- ・ヒメリンゴをかごに入れて各学級へ届け、「半分に切って食べてください」「おかわり用もあるよ」などと伝える。3・4歳児から「ありがとう」と言われ、満足そうに帰ってきて、学級のみんなに収穫から分配までのてん末を報告する。



指導・援助（環境の構成）の視点

- ・年長児として3・4歳児とのかかわりがもてるように、ヒメリンゴの収穫を好きな遊びの時間にしてその様子を見られるようにしたり、収穫したものを見せに行く機会をつくったりする。
- ・一緒にいる友達と話し合いながら、自分たちで収穫したものをどうするか決められるよう、様子を見守りながら必要な助言をする。
- ・10までは数えられるようになった実態を踏まえて、収穫物の数え方を自分たちで考える手掛かりとして、ヒメリンゴを10個ずつの列に並べて数える方法があることを示したり、各学級の幼児数（配るのに必要な数）を○の数で提示したりする。

家庭との連携の視点

できれば収穫した当日に生き生きとした子どもたちの取り組みの様子を伝え、この体験に含まれている幼児期の「学び」についての理解を深める。

- ・ヒメリンゴの大きさや色の違い、匂いなど様々な感覚を通した気付きがあること
- ・年長児として3・4歳児の気持ちを考えてあげようとする気持ちが育っていること
- ・具体物とのかかわりを通して数に対する感覚を養っていること

① 「学びの芽生え」から「確かな学力」へ

小学校第1学年(4月) 算数科 単元「なかまづくりとかず」の導入

これまでの様子

- ・1年生に入学してくる児童は、何らかの形で、数を知っている。「1、2、3」と数えることや順番に唱えること、書くことなど、その児童がこれまでの生活の中で数とかかわり、関心をもった過程によって、数の理解の仕方はさまざまである。
- ・ここでは、「数」の意味や表わし方についての正しい理解の基礎をつくるため、本単元の導入として、「なかまあつめ」「1対1対応による動物の数くらべ」「動物とおはじきなどを1対1対応させた数くらべ」を取り上げる。それぞれの児童がこれまでの生活で得た数字や数詞の知識とかかわりなく、「数でくらべる」前段階として、ものどものを1対1対応させることで「ものの個数をくらべることができる」ことを知る。

ねらい

○ものの個数は、そのものの大きさ、色、ある場所などの属性とかかわりなく、多い、少ない、同じを比べることができることを知る。

単元のねらい

○10までの数について、個数の数え方や数の読み方、書き方、数の構成などを理解し、数を用いることができるようにする。

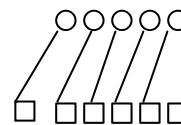
児童の活動

絵の中に描かれた動物を見て、なかまあつめをする。

- ・教師が教科書2、3ページを示し、「この絵を見てください。いろいろな動物がいますね。パンダはどこにいますか。どんなことに気が付きましたか」と聞くと、「門のところ」「3匹いる」「みんな違う色の服を着ているよ」「靴の色も違うよ」「ここにはちょっとしかいないから、他のパンダはまだ学校に残っているのかな」など、絵を見て思いついたことを次々に発言する。
- ・サル、カバ、コアラについても順に聞く。教師が「パンダがどこにいるかわかるように仲間集めをしましょう。よい方法はないでしょうか」と聞くと、「顔にパンダってかく」「パンダは○、サルは△、カバは□っていうように、ちがう印をつける」「同じ仲間を大きな○で囲む」などと答える。「いろいろな方法がありますね。どの方法がよいか、みんなで考えてみましょう」児童の意見を聞いて、おおきな○で囲むことになり、動物ごとに鉛筆で○で囲む。

1対1対応の操作による個数比べ[多い・少ない・同じ]をする。

- ・教師が教科書4ページを示し、「絵の中のウサギはみんな一輪車に乗れるでしょうか。」と聞くと、「乗れる気がする」「ウサギが少ない」「一つだけ小さい一輪車があるよ」「ウサギが5匹で、一輪車が6台だから、えーと」などと発言する。ページの下部の絵に気付いて、「ウサギと一輪車を鉛筆でつないでいるよ」という児童もいる。教師が「いろいろな確かめ方があるそうですね。さあ、どうしたらいいかな」と問いかけ、ウサギと一輪車を1対1の対応をして、個数をくらべることができることに気付かせる。



動物とおはじき、タイル、ブロックなどを対応させ、半具体物を使って比べる。

- ・教師が教科書2ページを示し、「実はちょっと困ったことがあるのです。カバとパンダが一人ずつ手をつないでバスに乗ることになったのです。」「みんなが手をつなげるか確かめようと、ウサギが一輪車に乗った時みたいにカバとパンダを線でつなごうと思ったら、間が離れているし、横にならんでいるので、線がぐちゃぐちゃになってしまいました。どうしたらよいでしょう。」と問いかけると、「間違えないようにきれいに線を引く」「カバとパンダを線でつなぐかわりに、順に頭に印をつけていけばわかるよ」などと答える。
- ・教師が「お話を聞いていて、よいことを思い出しました。みなさん、箱の中にこんなきれいなおはじきを持っていたでしょう。あれを使ったらどうでしょう。頭に印をつけるかわりに赤いおはじきをカバの上の一つずつ置いてみましょう。そして、今度は青いおはじきをパンダの上に1匹の一つずつ置いてみましょう。」と言うと、「赤が多い」「青がちょっとだ」「赤が4個で青が3個だ」「カバで手をつなげない子がいるよ」などと気付いたことを言う。
- ・教師が教科書3ページを示し、「このままだと、赤と青のおはじきをくらべにくいですね。すぐにくらべられるよい方法を見つけました。お客が誰も乗っていないバスがあります。これを借りましょう。上の列のイスにカバの赤いおはじきをのせてください。下の列のイスには、そう、パンダの青いおはじきをのせてください。ほら、どちらが多いかすぐわかるでしょう。」と言うと、「赤が多いよ」「すぐわかる」などと言う。続いて、他の動物をブロック、タイルなども使いながら繰り返しくらべる。

指導・援助の視点

- ・「もの」と「数」の間にブロックやおはじき、タイルなどの半具体物を媒介させることにより、ウサギ1匹の「1」も、一輪車1台の「1」も、パンダ1匹の「1」も、おなじ「1」という数に抽象化され、数は個数を表すことを理解する。この後、順番を表す数の理解に進んでいく。
- ・ものの個数を、そのもの自体（たとえば動物）の大きさや位置、並び方に関係なく比べることによって、個数を表すものとしての数の認識の基礎を培う。そのため、「1」から「5」までの数の指導には特に時間をかけ、もの→タイル→数詞→数字と対応させ、繰り返し指導することが大切である。ここでなかまさがしや色ぬりなどを十分に体験することが、ひいては足し算、引き算のスムーズな理解につながっていく。
- ・就学前に様々な経験を通して培われた数に関する感覚は、今後の算数の授業だけでなく小学校におけるすべての学習の基盤となることに留意して、指導を工夫する。

家庭との連携の視点

- ・数の学習の基礎となるものは、日常の生活であり、毎日の生活の中で数にふれ、体験していることが、数の学習の理解につながる最も大切なことであることを伝える。
- ・家庭では、「お兄ちゃんの方が1つ多い。」「3こあげるね。」など、数をくり返し体験させること、学校で習ってきた数を「あと4こ残ってる！」などと子どもが見つけた時に、家族と一緒に喜び、感動することが大切であることを知らせる。

② 「人とのかかわり・感じる心」から「豊かな人間性」へ

幼稚園2・3年保育5歳児（10月下旬～11月上旬）

「ゆっくり回る台を作ろう（回転寿司屋）」（グループの共同製作）

これまでの様子

- ・毎年、5歳児が学級全体で取り組み、いろいろな店を作って3・4歳児や保護者にお客として来てもらう『〇〇ランド』を今年もやることになった。やってみたい店が30以上挙がり、「食べ物のお店はあった方がいい」「ゲーム屋は、お客さんが楽しんでくれる」「運動会でやった海賊をやろう。今、海賊船を作っているし」「回転寿司をまたやりたいなあ」などと話し合う中で、数日かけて6つのグループに決まった。
- ・その後、グループごとに集まり、保育者も入って「どんなお店にしたいか」「必要な物は何か」など、相談をしていった。

ねらい

○友達と一緒に活動する中で共通の目的を見だし、思いや考えを出し合ってやり遂げようとする。

経験している内容

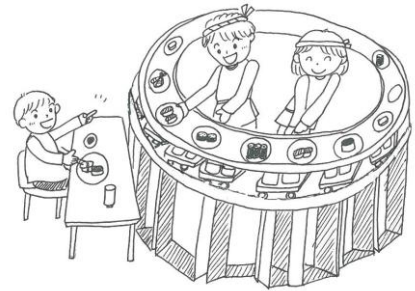
- ・グループで作る物のイメージを重ね合わせ、共通のめあてに向けて友達と一緒に作り上げていく楽しさを味わう。
- ・これまで経験したことや知っていることを相手に伝えたり受け止めたりしながら、自分たちで進めていこうとする。
- ・お客さんにお寿司をふるまって喜んでもらうということを通して、必要なやり取りをしたり相手に合わせて対応を変えようとしたりする。

取り組みの姿

- ・『回転寿司屋』のグループには、1学期に好きな遊びで回転寿司ごっこを繰り返し楽しんでいた数人を含め、7人（男児6・女児1）が集まった。
- ・「回転寿司は□□ずしだよねー」と大半の子どもが地域にある回転寿司屋について共通にイメージするものがあったようだった。1学期に回転寿司ごっこをしていたA児とB児は、「回す台はどうする？」「段ボールで作った丸い台をこまみたいに回したら、回りすぎてお寿司がこぼれたよね」「ゆっくり回る台にしないと、お客さんがお寿司を取れないと思うよ」と、以前うまくいかなかったことを他の幼児に話した。そこで、今回は「本物のお寿司屋さんみたいにゆっくり回せる台を作る」ことがグループの目標となった。
- ・保育者も話し合いに加わり、中に店の人が入って回すドーナツ型の台をつくることになった。「でもそんな形のテーブルは幼稚園にはないよね」「段ボールで作る？」「段ボールの下に、回るものをつけたら？タイヤとか」「あっ、キングブロックのタイヤは？」「いいね」と次々にアイディアが出て、普段から遊びで使っている大型ブロックのタイヤをドーナツ型の台に貼り付けて回すことになった。
- ・保育者が大きな段ボールにドーナツ型の線を引き、子どもが段ボールカッターで切ることになった。

7人が数枚の段ボールを時間をかけて、「そっちを押さえていて。俺がこっちから切るから」「ここまで切ったら交代しようね」など、声をかけ合いながら切っていた。

- ・ドーナツ状の板ができると、「私、ガムテープを手で切れるからその係やるね」「おい、二人一組でやろうぜ」と大型ブロックのタイヤを段ボールにガムテープで貼り付ける作業を進めた。回転台の受けは、巧技台の枠を円型に並べた。段ボールと大きさが合うようにするのが難しく、形を確かめながら何度も並べ直し、ずれないように床に固定する作業も7人みんなで力を合わせた。土台ができあがると、その上にタイヤをつけた回転台を乗せ、何人かが中心部分に入り「せーの」と回してみると、ゆっくりと台が回り、「できた!」「これならお寿司が落ちないね」とグループの全員が納得する回転テーブルができ上がった。
- ・その後お寿司やデザート、飲み物なども素材や作り方を工夫しながら、約2週間かけて自分たちの考える回転寿司屋の準備を進めた。
- ・お客の来る当日は、お客の呼び込み係、回転台を回す係、レジ係とそれぞれが役割分担し、時間が来ると、自分たちで声をかけ合って交代していた。
- ・1日目は保護者がお客になり、「ほしいものはどうやって頼むの」と聞かれると「中にいる人に注文してください」と答え、「お寿司も飲み物もよくできているね」とほめられ、仕事の進め方にも自信をもった様子だった。3・4歳児がお客になる2日目は、戸惑っている3・4歳児がいると「こちらの席どうぞ」「何が食べたいですか？取ってあげようか」「お醤油を付けて食べてね。でも本当に食べちゃダメだよ」と優しく教える姿が見られた。



指導・援助（環境の構成）の視点

- ・グループの中でそれぞれの経験や知っていることを確かめ合うことで共通のめあてをはっきりさせ、自分の思いや考えを出せるようにする。
- ・子どもの思いを受け止めて、製作する物の具体的なイメージが明確になるような素材やイメージを実現するための用具などを提示し、共通のめあてに向かって自分の力を発揮し、グループの友達と一つの物を作り上げる経験を通して友達と協力して取り組む充実感や達成感を味わえるようにする。
- ・保護者、年少児など様々な人とのかかわりの中で、やり取りを楽しむことや相手の状況に合わせて動くことを経験できるようにする。

家庭との連携の視点

- ・随時、取り組みの様子や子どもたちの姿の変化を写真掲示や学級通信で伝えるなど、「活動のねらい」や「経験している内容」についての理解が深まるようにする。
- ・お客としての保護者のかかわり方を伝える時間を事前にもち、子どもたちが自分の役割や仕事の進め方に気付いていくきっかけとなるようにやりとりを工夫してもらう。

② 「人とのかかわり・感じる心」から「豊かな人間性」へ

小学校第1学年(4月) 生活科 単元「みんなともだち(2年生との学校探検)」

これまでの様子

- ・入学当初に、昇降口と靴箱、教室、便所、職員室、保健室など、学校生活を送る上で必要な場所は伝えたが、校舎内で自分から行動する範囲は、日常生活に最低限必要な昇降口から教室、便所の往復だけという児童が多い。
- ・1年生と2年生は、「自宅がすぐ近くにある」「同じ幼稚園や保育園に通っていた」など、以前から顔見知りである子ども同士以外は互いに顔も名前も分からず、声をかわす機会がない児童も多い。
- ・この活動の事前顔合わせとして、1年生と2年生の4人グループをつくり、自己紹介をした後、校庭でグループごとに遊んだ。また、2年生は今回の事前準備として、校舎内の教室などに案内の貼り紙を貼ったり、自己紹介カードを1年生に渡したりしている。

ねらい

- 先生や友達と一緒に遊んだり学んだりして、共に生活する楽しさを味わうことができるようにする。
- 学校の施設を利用したり、先生や友達、学校生活を支えている人々とのかかわりを深めたりしながら、学校の様子が分かり、楽しく安心して生活ができるようにする。

児童の活動

- ・1年生、2年生で4人グループになり、2年生の案内で学校探検する。校内のポイントには教師がいて、ポイントを通過するにはクイズやゲームを4人で協力して行わなければならない。
- ・2年生の説明を一生懸命聞いたり自分から分からないことを質問したりして、2年生に案内してもらうことを楽しみ、ポイントでは2年生に助けをもらいながら、教師のクイズに熱心に答えていた。
- ・一度顔合わせをして遊んだことで、2年生は1年生の名前を覚えていて「〇〇ちゃん、こっちだよ。」という場面も見られた。1年生は、楽しみながら学校の施設について知ることができた。
- ・5月になって、1年生は、自分たちだけで学校探検をし、学校の中をさらに詳しく調べたり、校内の様々な人にインタビューをしたりした。今回の経験が生かされ、目的の場所へ迷わず行くことができ、校内の人たちにも親しみをもってかかわることができた。
- ・6月には、この4人グループで手をつなぎ、公園まで遠足に行った。オリエンテーリングをしたり広場で遊んだりして、交流を深めた。



指導・援助の視点

- ・グループを作る時点で、2年生が一方的にリードするのではなく、1年生が自分らしさを発揮して活動に取り組むことができる関係が作れるようにメンバー構成に配慮する。
- ・今回の学校探検は2年生が様々な準備をしたが、この後にあらためて1年生だけで学校探検を行い、2年生の言動をモデルとして生かし、自分たちがどのように行動したらよいか考えることができるようにする。
- ・入学当初はお世話に来る6年生とのかかわりが多いが、2年生と話したり遊んだりする活動を通して子ども同士のかかわりが広がり、1年生にとって学校のことを知ることができるよい機会となるようにする。
- ・本当に困った時以外は、2年生と1年生が自分たちで相談し解決できるよう、安全に配慮した上で教師は見守る態勢を取る。

家庭との連携の視点

- ・学校や地域では大勢の人が1年生を見守り支えていることを知り、自分も学校や地域の一員として楽しく暮らそうとする気持ちを育むように家庭でも児童と接するように協力を仰ぐ。

③ 「生活習慣・運動」から「健康な心と身体」へ

幼稚園2・3年保育5歳児（1月～3月）

「見通しをもって自分の力で生活しようとする」（生活習慣と主体性）

これまでの様子

- ・それぞれの幼児が見通しをもって遊びや生活を進めていけるように、学級全体で確認することが必要な時には、『きょうのよてい』を書いたホワイトボードと手作り時計の針の位置で集まる時間を知らせ、その日の流れを確認したり『こんしゅうのよてい』表で一週間の予定を確認したりしてきた。3学期にはそれがすっかり定着し、登園すると予定表を確認する姿が見られるようになった。
- ・弁当の時間は、弁当当番がテーブルを拭き、お茶のやかんを運んで各自のコップにお茶を注ぐ。準備ができると、当番が前に出て「いただきます」の挨拶をする。「ごちそうさま」は、これまでは個々の食事のペースに合わせて、食べ終わった幼児から自分で片付けて遊び始めることにしていた。
- ・学級全体での集まり方は、椅子を使わずに床に座ったり、椅子を床に貼ったテープに沿って並べたり、その時々活動内容によって形態を変えていた。椅子の並べ方も、「グループごとに1列になって椅子を並べる」「絵本を見る時は広がりすぎないよう椅子を詰めて並べる」など、条件を伝えるようになってきた。

ねらい

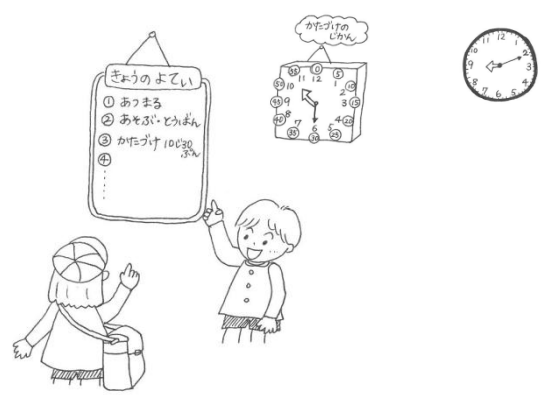
○自分なりに考えて、見通しをもって生活を進めていこうとする。

経験している内容

- ・表示や時計を手掛かりに、自分なりに生活の流れに見通しをもって行動しようとする。
- ・学級のみんなと一緒にすることが分かって、必要なことを自分なりに考えようとする。
- ・みんなで一緒に過ごしていくためには、保育者や友達の話をしっかり聞いたり、自分の考えを相手に分かるように話したりすることが必要であると感じ、自分なりに判断して行動するようになる。

取り組みの姿

・3学期になると、登園すると『きょうのよてい』のホワイトボードを確認し、予定の時刻になると保育室の時計で確かめ、「長い針が3になったぞ」と自分たちで声をかけ合って集まるようになってきた。保育者が予定を書き忘れていたりそれに気付いて、「先生、これ昨日のままだよ」「好きな遊びと片付けと弁当は昨日と同じだよ。だから、そこ以外は消しといたよ」と言うなど、自分なりに見通しをもって過ごそうとしている言動が増えてきた。



・保育者も「片付けですよ」という直接的な指示でなく「そろそろ予定の時間だけど、時計を見てね」と自分で気づいて動いていける言葉かけをするよう心がけた。遊びに夢中になって時間を忘れてし

- もう子どももいたが、子ども同士で「もうお片付け時間だぞ」と声をかけ合っている姿が見られた。
- ・ 2月中旬の小学校見学では給食も見学することを知らせ、「小学校では“いただきます”も“ごちそうさま”も時間を決めてみんなでやっているんだって」と話し、「今日のごちそうさま時間」を決めて時計に印をつけ、その時間までに食べ終えるよう目安をもてるようにし、食べ終わってもすぐに遊びに行くのではなく、絵本などを見ながら“おなか休め”をして待つようにした。すると、食事のおしゃべりが多く時間が長くかかりがちな幼児も「○(に長い針が来る)までに食べ終わろう」と意識をもって食べようとする姿が見られるようになった。
 - ・ 集合時は「今日は椅子あり？なし？」と保育者や周りの友達に確認し、「次は修了式の練習をするんだよね」「じゃあ、名前順に椅子を並べよう」などと次の活動を聞いて自分たちで椅子をどう並べるかを考えて動くようになった。
 - ・ これまで、保育者が話をしている時、自分が思ったことや聞きたいことを話の途中でも言う姿が見られたが、「質問は最後まで話を聞いてからね」と気付かせ、“質問タイム”をとってみんなが注目する中で発言する機会を設けるようにしたところ、話を最後まで聞いてから自分が話したいことを手を挙げて話そうとする姿が多くなった。

指導・援助（環境の構成）の視点

- ・ 子どもが「自分の生活」を意識して一週間や一日の生活を自分なりに見通しをもって過ごせるよう、見やすい場所に予定を表示して、いつでも確認できるようにしておく。
- ・ 時刻の読み方が分からなくても、見ただけで集まる時間が理解できるような時計の表示をする。
- ・ それぞれの子どもが必要に応じて自分の動き方を調整できるよう学級としての生活の流れを設定し、緩やかに変化させていく。
- ・ 学級全体で集まる時、なんのために集まるか目的をはっきり示し、どのように準備したり、行動したりしたらよいか自分たちで考えていけるようにする。
- ・ 状況に応じて、集合時の雰囲気（アットホームな雰囲気とフォーマルな雰囲気）を感じて意識を切り換えさせる。

家庭との連携の視点

- ・ 懇談会や個人面談など様々な機会を通して、一日の生活に自分なりに見通しをもって行動することの大切さを伝え、家庭でも幼児自身が時間の見通しをもって生活できるよう一緒に考えていく。
- ・ 特に小学校生活に不安をもつことの多い第一子のいる家庭には、小学校生活のあらましを伝え、最低限必要な身支度、所持品の始末、便所の使い方等、生活習慣が自立しているか改めて見直すよう働きかける。

③ 「生活習慣・運動」から「健康な心と身体」へ
小学校第1学年(4月) 「小学校の生活」

これまでの様子

- ・ 集団生活のルール、当番活動の経験、集団遊びの内容などは、在籍していた園によってそれぞれ違っており、少数であるが集団生活の経験がない児童もいる。
- ・ しかし、どの児童もそれぞれの園で学んできたことや家庭で身に付けてきたことを生かし、新しい環境で1年生らしく自分なりに生活しようとしている。
- ・ 4月当初は緊張もあり、教師に言われたことを忠実に守ろうとするが、小学校の環境や学級集団に慣れてくると自分の主張を強く出す児童も出てくる。また、友達関係も変化し仲良く遊ぶ場面が増える一方で、トラブルも起こるようになってきた。

ねらい

- 学校での生活の仕方に見通しをもって、生活のルールやマナーを身に付ける
- 互いの気持ちを通わせるためにあいさつが大切であることを知り、自分からしようとする

児童の活動から

【基本的生活習慣(あいさつ)】

- ・ 朝のあいさつ、授業の始めと終わり、職員室や保健室に入る時など、学校の具体的な場面でのあいさつの仕方を教わると、元気よく大きな声を出す子ども、小さな声でそつと言う子どもなど、いろいろな姿が見られる。
- ・ 朝、教師に会って、小さな声だが「おはようございます」と言う。教師に「上手にごあいさつできましたね」とほめられ、恥ずかしそうに笑う。

【国語の授業】

- ・ 『「あ」のつく言葉集め』をする。始めは、それぞれが一斉に自分の知っている言葉を言うが、教師に「みんなが一度に言うと、お友達がどんな言葉を言っているか分かりませんね。言いたい人は手を挙げて、自分の名前を呼ばれたら、みんなに聞こえるように発表してください」と言われ、一斉に手を挙げる。友達が発表している間も、「はい、はい」と大声で手を挙げる。教師の「みんな、お友達にいっぱい聞いてほしいのね。では、お友達のお話もよく聞いてみましょうね。発表したい人は、お友達のお話が終わってから手を挙げてください」という言葉にうなずき、友達の話が終わるのを待つようになる。
- ・ 45分間の授業時間が、「言葉集め(ひらがなに興味をもつ)」「字を書く練習」「教科書を読む」という三つの柱で構成されており、例えば斉読の場面では、「読んでいる場所を指でなぞる」「先生に続いて読む」「ゆっくり、はっきり読む」「グループごとに読む」「友達が読んでいるときはよく聞く」など、それぞれの場面での指示がはっきりしているので、授業の最後まで教師の話聞いて取り組んでいる姿が見られる。

【給食】

- ・ 教師から配膳の仕方を聞く。教師と6年生が配膳してくれる間、別の6年生がそれぞれのグループのそばについて、見守る。待っているうちに友達との話に夢中になっていると、そばに寄り添った6年生に「先生のお話をよく聞いて給食をもらいに行こうね」とそっと声をかけられ、うなずいて静かになる姿がある。
- ・ 配膳が終わって戻ってくると、6年生に「全部もらったかな」と聞かれ、お盆の上の物を一つ一つ確かめる。みんなの配膳が終わるのを待つ間、「今日のおかずの中で何が好き」「すぶたが好きなもの」「僕と同じだね」などと1年生と6年生が楽しそうに話をしている。



指導・援助の視点

- ・ 各教科の授業、給食指導、学級指導など学校生活の様々な場面での積み重ねを通して、集団生活のルールやマナー、学習規律が身に付くようにする。
- ・ 目標は小さく、長いスパンで設定し、できたら次のステップへ進むよう配慮する。

家庭との連携の視点

- ・ 年度当初の保護者会で学校の教育目標や学校経営・学級経営についての視点を十分に説明し、保護者に協力を依頼する。その後は個人面談を実施したり、個に応じて連絡帳でのやりとりを行ったりして、共通理解を深める。
- ・ 家庭学習については、必要に応じて保護者に丸付けなどを依頼し、学習の進度や子どもの理解度などを把握してもらおう環境をつくる。

(敬称略 職名は委員在任時のものである)

保育園・幼稚園と小学校の教育連携検討会委員

大槻 千秋	私立中野みなみ保育園園長
安西 弘子	私立聖ピオ保育園園長
我孫子 真知子	中野区立昭和保育園園長
滝瀬 恭子	中野区立本町保育園園長
関 政子	私立やはた幼稚園園長
永見 俊光	私立こまどり幼稚園園長
若槻 容子	中野区立かみさぎ幼稚園園長
江平 秀子	中野区立大和小学校校長
井出 良子	中野区立桃花小学校校長 (平成23年度)
松本 恵美子	中野区立武蔵台小学校校長 (平成24年度)
喜名 朝博	教育委員会事務局指導室長 (平成23年度)
川島 隆宏	教育委員会事務局指導室長 (平成24年度)
海老沢 憲一	教育委員会事務局就学前教育連携担当副参事

保育園・幼稚園と小学校の教育連携検討会作業部会委員

熊倉 聡	私立中野みなみ保育園保育士
曾根 せい子	中野区立本町保育園副園長
澤栗 三幸	中野区立弥生保育園副園長
稲富 小奈	私立まこと幼稚園教諭
小池 友美	中野区立かみさぎ幼稚園主任教諭
青木 仁望	中野区立ひがしなかの幼稚園教諭
高波 昌子	中野区立上高田小学校教諭
山下 智美	中野区立桃花小学校主幹教諭
奥田 智子	中野区立緑野小学校主任教諭

作成協力者

佐々 昌樹	私立まこと幼稚園園長
橋浦 義之	中野区立啓明小学校校長
安藤 容子	私立桃園幼稚園園長
小早川 淳子	私立桃が丘さゆり保育園園長
小泉 美奈子	中野区立橋場保育園園長
赤沢 明美	中野区立大和東保育園副園長

参考文献

- 就学前教育プログラム (東京都教育委員会 2010)
就学前教育カリキュラム (東京都教育委員会 2011)
幼児期運動指針ガイドブック (文部科学省 2012)
あたらしいさんすう1 (東京書籍 2011)
中野区教育ビジョン (第2次) (中野区教育委員会 2011)
中野区次世代育成行動計画 (後期計画) (中野区 2010)
中野区みどりの基本計画 (中野区 2009)
調査研究報告書 (中野区幼児研究センター 2008, 2009, 2010)
体力向上プログラムガイドライン (中野区教育委員会 2010)
中野区運動遊びプログラム第2版 (中野区幼児研究センター 2012)
はじめよう幼稚園・保育所「小学校との連携」—実践事例集—
(フレーベル館 2009)

編集

- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 海老沢 憲一 | 教育委員会事務局就学前教育連携担当副参事
(幼児研究センター所長) |
| 横尾 澄子 | 幼児研究センター |
| 柴田 みどり | 幼児研究センター |
| 高木 基行 | 幼児研究センター |
| 太巻 美青 | 教育委員会事務局指導主事 (平成23年度) |
| 岡崎 奈緒子 | 教育委員会事務局指導主事 (平成24年度) |

中野区就学前教育プログラム

平成24年12月13日

中野区教育委員会